
Magus Magina † マギウスマギナ †

UVER00X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g u s M a g i n a t マギウスマギナ†

【Nコード】

N 2 5 1 7 N

【作者名】

U V E R O O X

【あらすじ】

元孤児だった主人公 玲。

冷たい雨の降る宵、謎の女性 琉奈に拾われ10数年間育てられた。
た。

しかしある日、玲は不運な事故で命を失ってしまふ。

彼が気がつくと、そこは科学と魔法が発達した世界だった。

そこは、人以外にも様々な種族の住む世界ハーツ。

玲を縛りつけている因果という名の歯車が今、動きだす。

この世界で彼は、いったい何を思い、何を感じるのか…。

彼を待ち受けるのは絶望か希望か？それとも…

Prologue プロローグ

それは冷たい雨の降る夜のことだった。

勢いよく叩きつける雨粒は、六月だというのに凍てつくような寒さで、ひとたび濡れれば骨の髄まで凍えきる……そんな雨。

天の涙は、建物を打ちつけ、アスファルトをえぐるかのような勢いで流れていく。

それはまるで、空から流れる滝と呼んだほうがいいかもしれない。どれほど降り続いただろうか。

ピチャ…………ピチャン…………

不意に、夜の帳が下りた路地に雨音とは違う小さく水面を揺らす音が響いた。

激しく打ちつける雨粒の飛沫の中、薄暗い路地に設けられた街灯のおぼろげな光に照らされて、小さな影が浮かび上がる。

その影の向こうから現れたのは、まだ幼い男の子だった。年齢でいうと五歳か六歳辺りの子供である。

真夜中の道路で傘も何も持たずに、冷たい雨の中をふらふらと今にも倒れそうに歩いてくる。

その身なりは、足には靴を履いておらず服はどろどろで頭から足の先まで傷が無数にあり、ところどころに服が破れて、血で服が赤く滲んでいた。

子供は、さらにふらついた足で二、三步歩いたところで倒れこんだ。それでも、前へ前へと腕を伸ばして少しずつ進んでいく。

這い進む十メートル先には、雨を凌ぐことができる無人休息所が見える。そこまで力を振り絞って前へと腕を伸ばして進んでいく、

九メートル……ハメートル……手がアスファルトで擦れて血が滲んできたが それでも止まることなく前へと進んでいく。

残り、二メートル……一メートル……と来たところでついに動力の切れた人形みたいに頭から水溜りに倒れこんだ。

手を伸ばせば届く距離に休息所の扉があるが、子供は動かない。いや、動けなかった。身体に容赦なく叩きつけられる氷雨にすでに体温は奪われ、冷たくなった身体には全ての感覚を奪われ指一本動かすことさえできなかったから。

それでも雨は降り続ける。その子供を嘲笑うかのように……。

……ピチャ……ピチャ……チャプン……

薄暗い路地の水溜りに再び小さく水面を揺らす音が響いた。

街灯の薄暗い光の下、もう一つの人影が浮かび上がる。

「貴方がレイですか？」

顔を上げ、焦点の合わない目で声のしたほうを見る。

相手の顔は視界がぼやけてよく分からないが、優しく包み込むような女性^{ソプラノ}高音の声から女性だと理解できた。

「貴方がレイですか？」

謎の女性はもう一度子供に問いかける。

「ぐ、……あ、うつ、……」

子供は声にならない声で答える。

「すみません。答えたくても答えられないですね」

「ぐ、あ、ううう……っ」

「自己紹介がまだでしたね、私の名前はルナ、リュウグウジルナ。貴方の新しい母親です」

その言葉を最後に子供は音もなく力尽きると水溜りに倒れこんだ。目の前が真っ暗になりすべての感覚が隔絶された世界へと吸い込まれるように落ちていく、意識の向こうからは、轟音と小さくでも力強い歌が流れているのが聴こえる……。

ルナは子守唄を口ずさみながら、子供を赤ん坊のように抱きあげると夜の闇へと溶けていった。

雨は勢いを衰えることなく降り続く、何かを拒絶するかのようにもしくは歓迎するかのように宵の街を包みこんだ。

この日、過去最大の豪雨を記録した。

＋＋＋

小春日和の朝ってどうしてこんなに眠いのだろう。

時刻はすでに7時半を回っていた。

カーテンを閉め切った部屋は薄暗く、その隙間からは朝の緩やかな日差しが優しく光の線を作っている。

よく片付けられた清潔感のある部屋の片隅には、ベットが置かれており、布団が不自然に盛り上がっているのが目につく。

よくよく、眺めて見ると規則正しいリズムに合わせて布団が上下に隆起しているのが分かる。

窓の外では小鳥たちがさえずりを奏でていた。

まるで、ここだけ世界から隔離されたような静かな空間。

突然そんな、静かな一時をぶち壊す一声が部屋の外から大音声で聞こえてきた。

「るい　っ！　起きなさ　　いつ！！」

静かな一時を壊した憎々しいにくにく一声に布団がモゾモゾと動き、一人の少年が顔をだす。

かなり整った顔立ちで、長くも短くもないセミロングの黒茶の髪は寝ぐせであっちこっちが撥はねているが、それでも絵になるような

光景。

「ふわあ〜」

見た目に似合わず両手を天に向け大きな欠伸あくびをする。

今さっき姉貴の声が聞こえてきた気がしたが気にせず二度寝、二度寝。

布団の中は体温と寝汗で蒸し暑かったが、布団の上は涼しくて気持ちいい……。

そのまま、仰向けの状態で意識が夢と現実の間で混濁としてきた。
トタタタタッ

邪悪な気配が足音と共に迫っていることは分かったが、睡魔には勝てずに、そのまままどろみの中へと沈んでいく。

「って、無視してんじゃ……ないわよおおおお　っ」

ドアが勢いよく開かれて琉惟の姉　奈緒なおが飛び込んできた。

奈緒はそのままの勢いを緩めることなく高く跳躍する。

そのまま、空中を滑らかな放物線を描きながら肘ひじの関節を鋭角に曲げると、仰向けで意識が混濁としている琉惟の腹部にエルボードロップを叩き込んだ。

どおおーん

決して人が起こせるはずがない人外の音が部屋に轟き渡る。それと、同時に琉惟の腹部に強大な力エネルギーが集中するのを感じた。その一撃で身体をくの字に曲げ、息も絶え絶えに叫ぶ。

「ぐっは　っっ！！　……ひ……肘はヤメロ、肘は、ホントしゃれになん……ね、え……」

そういう問題ではないが、あまりの衝撃にうまく思考がまとまらない。

さらに、さっきの一撃で家が揺れた気がするが今はそれどころで

はない。それより、あの一撃を喰らって生きているのが不思議なくらいだった。

「……そ、れに……オ、オレのベットは……ガハッ……リ、ングじゃない……」

そう呟くと、琉唯は力なくベットにその身体を沈めた。

十

十分後

「いてて……」

制服に着替え終えた琉唯は、まだ痛む腹を抱えながら食卓に着く。あの後、半強制的にたたき起こされたのだ。

その、様子を流し眼で見ていた奈緒が口を開く。

「まったく……貧弱な男ね。そんなんじや、彼女の一人や二人、守れないわよ」

「うるさいっ！ 朝からあんな喰らってそのままぴんぴんしていた方が怖いわ！」

「あれでも手加減したつもりよ？」

「ど、こ、が手加減したつもりなんだよ！」

「あら、私が本気を出したら琉唯どころかこの世界が崩壊するわよ」

「すいませんしたっつ！ お姉さま！」

「嘘よ」

さらりと言い捨てるが、俺の姉貴が言ったら冗談に聞こえないのはなぜでしょう？

「はいはい、さっさと食べなさいよ。初日から約束の時間に遅刻するわよ」

そう言いながら、奈緒は朝食を並べていく。今日の朝食は、サンマの塩焼きと味噌汁、漬物にごはんという至って普通の庶民食だ。

『そんなことは、分かってる』と、気に障らない程度に反論すると奇麗に並べて置かれている箸を掴み取り、琉唯は並べられた朝食

を次々と口に運んでいく。

食事と睡眠の時間は、俺の人生の中で一番幸せなひと時だ。そんなひと時の内、睡眠の時間を台無しにされ、食事の時間も台無しにされてはたまったもんじゃない。

「しつつかし、姉貴はホント日本食だけうまいよな……ズズズー」

味噌汁を口にしつつ俺のふと出た言葉に、奈緒がぴくりと反応する。

「ちょっと、日本食だけってどういうことよ？」

奈緒が俺の言葉に異議があるとでも言いたげに食いついてきた。

「あ？ そのままだって。この前作ったハンバーグと言い張るもの。ありや炭だぜ、すみ。炭素・C、分

かる？ あれ、食べられる部分は一切なかったぜ？ それに、フライパン炎上してたじゃねーか！」

「……ちょっと、フレンチ風にしようと……」

「するなっ！」

あの時は、ギリギリのところであれが気づいたからいいものの、気付かなかったら俺たちもあのハンバーグみたいになっていたかもしれないと思うと、全くとって恐ろしい。

「チャ、チャーハンならできるわよ」

「チャーハンって焼き飯のことだろ」

とつても鋭いツツコミをする琉唯。

「そ、そうとも言っわね……」

俺の鋭い言葉にプルプル震えだす奈緒。

「そ、それなら、ラーメン……」

「インスタントっ！？ ……………じゃん！」

ゴンッ

奈緒が言い終わるよりも早く、鈍い打撃音と琉唯の渾身のツツコミが炸裂する。その打撃音は、我慢の限界だった奈緒の拳が脳天に

直撃した音だ。

「ぐおおー、俺の脳細胞が」

椅子から転がり落ち、頭を押さえて床をばたばたとする姿は、最初の印象が幻想だったのかと思えてしまうほど哀れなものだった。

「大丈夫よ、琉唯の脳細胞はすでにイかれてるから」

「ヒドイっ!」

「本当の事でしょ?」

奈緒は、粗暴こそ悪いが勉強に家事、運動すべてにおいて完璧な優等生でかくして俺は、勉強はダメ、家事もダメ……運動は学年で最もできる方だが姉貴には遠く及ばない。つまり、姉貴は外国食が作れないのと粗暴が悪いのを除くと完璧人間なのだ。

だから、姉貴に言わせれば俺の脳細胞なんてゴミくず以下なのだろう。

「ぐむむ、反論できません。というか、なんでこんなに姉弟で差があるのか! 神よ……」

神を信じているわけではないが、何となく十字を切る動きをとる。

「あんたの脳内が毎日お祭り騒ぎだからでしょ!」

両手が使えないため受け止めることができず、本日二度目の鉄拳が琉唯の頭に落ちてきた。

「ぐおおー、俺のただでさえ少ない脳細胞が……」

「はいはい、おつおつ」

「おざなりなっ!」

「分ったから、早くしないと置いて行くわよ」

「くそー、いつかこんな家出てってやるう」

それがいつになるのかは分らないが、椅子の上に置いておいた学生靴をつかむと玄関へ走ったのだった。

キャラ紹介／設定／能力etc.

キンギョさんより挿絵

> i 1 2 9 6 2 — 2 3 1 <

・龍宮寺 玲 りゅうぐうじ れい

白陵大付属柊学園に通う高校二年。

元孤児院育ちで、瑠奈という女性に引き取られたが、彼女は出張のため家にはいない。どこで何の仕事をしているのかも不明だが、たまにフラリと帰ってきては気がつけばまたすぐにいなくなる。

そのため家事全般のスキルは習得しており、墮落した生活はしていない。

幼い頃の出来事で琉唯《るい》と親友になった。
特徴のないどこにでもいる人なので影が薄かったりする。

・椎名 琉唯 しいな るい

白陵大付属柊学園に通う高校二年。

曲がったことが嫌いで正義感が人一番強いが、授業中に惰眠を貪むさぼったりする中途半端な一面もある。

胸元を開けたり地毛が茶髪だったり、不良っぽい雰囲気が出ているためよく絡まれたりするが、幸か不幸か、とある理由で身体が頑丈なため、今まで喧嘩で負けたことがない。

成績は残念感が否めなく、入れたのが不思議なくらいで学園中にいろいろな意味で有名。

また、両親を幼い頃に事故で亡くし、親戚が身元引受人として世

話してもらっていたが、籍を移してはなく居候いそうという形で世話になっていた。高校に入って、姉と二人でアパートを借り暮らしている。肉親がいけないという理由で玲とは気が合い、親友になった。

・椎名 奈緒しいな なお

白陵大付属柊学園に通う高校三年。

琉唯の姉で出来ない弟と打って変わったような完璧人間。ただ、ガサツで乱暴がネックなのだがそれは家の中で弟と自分だけの空間の場合にだけで、学園では、二年の時から三期連続で生徒会長を勤つとめ、学園中にその偉業を轟とどろかせた。

そのため、学園では”お姉さま”と親しまれている。

極度の外国料理音痴だが、本人はそれを認めない。日本食は、一流料理店のシェフと遜色そんしよくないが、外国料理だと凄まじいものが出る。

また、腕っ節や腕力が無駄にあるので、琉唯がこうした姉の暴力で頑丈になっている。

家計を一人で支えており、見た目によらず気苦労することもあるが、九割方琉唯が絡んでいるので憂うれさ晴らしと称して暴力を振るう根源は尽きない。

・桜咲 鳴実さくさき なるみ

白陵大付属柊学園に通う高校二年。

ごく普通の家庭に生まれ、何不自由のない程度の生活を過ごしている。

父親がイギリス人と日本人のハーフのため、クォーターである。髪が朱あしがかっているのはそういう理由でほかには特にこれといった違いはない。

また、父親は有名な探検家でほとんど家にいる時間がないため、実質母親と二人暮らしである。

玲と同様に、これといって特徴がない娘だが、少々天然気質の入った人なので人気があったりする。

小さい頃は人見知りが激しかったが、最近は大分マシになった。

キンギョさんより挿絵

> i 1 2 8 9 7 — 2 3 1 <

すぎした
・杉下 清次郎

白陵大付属柊学園の教師。

一年の時から玲と琉唯の担任教師でかなり大雑把な性格だが多くの生徒から支持を受けている。

（あかねにまるに出てくる主人公の担任と同姓同名、同性格なのは指摘しないでください…。）

Chapter 1 平穏な日常

パタパタと小走りに余裕を持つて待ち合わせ場所の公園に行く。
公園は、通学路の脇にある小さな遊具場所で、錆びたブランコや
今となつては小さ過ぎる砂場があるくらいの本当に小さな公園。

ここは、小さい時にみんなで遊んだ思い出の場所だ。

小さい公園なのに梅檀せんたんの木があちらこちらに植えられており、視
界が狭く遊ぶのには不自由はなかった。

奥の方の梅檀せんたんに隠れたブランコの方へ進んでいくとすでに二人の
先客がブランコに腰かけていた。

「お、玲となるちゃん！はよーすっ」

「二人ともおはよう」

手を軽く掲げて琉唯、奈緒の順に挨拶をしながら二人に近寄る。

その二人は、俺と奈緒の挨拶でこちらの存在に気付き、こっちの
方に視線を向ける。

ギー……ギー……

耳障りな 錆びて金属を擦すり合わせた時の音を響かせながら挨
拶が返ってきた。

「奈緒ちゃん、琉唯君おはよー」

「おはようございます」

声の主は、どこにでもいそうな学生と髪を染めたような暗い赤色
の髪が印象の女子学生である。

まず初めに挨拶を返してくれた暗い赤色 緋色の髪の少女は桜
咲鳴実。

髪が赤いのは生れつきで、黒に近い赤色の髪をしているのが目を
引く。

彼女は父親がイギリス人と日本人のハーフで自然髪の色が赤かつ

たのが遺伝してこうなったらいい。もちろん、母親は日本人である。つまり、早い話がクォーターだ。

そして、その隣にいる人は龍宮寺玲^{りゅうぐうじれい}。

勉強、運動どちらも平均より少し上のどこにでもいそうな奴で、あえていうなら、落ち着いた態度が印象的だろうか。

玲は、俺、奈緒と鳴実の幼馴染であり、礼儀作法はいいが見た目に合わず俺の悪友でもあり、親友でもある。

「全く、お前から来るの早えな」

今年から二年だが、一年の時から一回として二人より早くこの、場所に待ち合わせたことがないのだ。

「そんなことないぞ、琉唯が極端に遅れてこない限り大体五分程度しか待ってないしな」

「で、ちなみに今日は？」

そんなことを言われると興味が出てきたので、尋ねてみる。

「うーんとね、三分くらいかな」

俺の問いに、玲が口を開くより早く鳴実が答えた。

「そんなもんなのか」

琉唯がへえと呟く隣で、奈緒がゆつくりと口を開く。

「はいはい…そろそろ行かないと混雑するわよ。話すなら歩きながらでもできるでしょ」

それはもつともです。お姉さま。

奈緒の言葉に俺たちはバラバラな返事をして通学路の方へ歩き出した。

十

空が高い……。

俺は、澄んだ青がどこまでも天高く伸びた空を見つめ、心の中で呟く。

今日から二年か……。

軽トラックが排ガスを撒き散らしながら坂を登っていくのが眼に映った。

去年となんら変わらない。街も景色も俺たちも……。

身体は高校生でも、小学生のようににはしゃぐ琉唯と鳴実を後ろから眺めつつ一人嘆息する。

この光景は、去年と変わっていない。変わったことと言えば通学路が綺麗に舗装しなおされたことぐらい。

龍宮寺玲。

少し、寝ぐせのついたパツとしない表情のしかし、そこが何かが見えそうな、そうでないような柊学園はなづかの学生。

俺たちの通う白陵大付属柊学園はなづかは地元では有名な進学校で毎年県外からも入学志願者が来るという学園で、この学園は中学から大学までエスカレーター式に上る事が出来るが年末に行われる学年末進級テストで合格点を取らないと中学から高校、大学へと上がれないというシステムのためエスカレーター式だと思って怠けていると進学出来なかったりする。

例えば、俺の前で走り回っている琉唯とか…。

まあ、何とか夜通し勉強を叩きこんでギリギリ合格点で通ったのだが…当の本人は、そんなことはどうでもいいようだった。

まあ、頭の中が常に楽しいことで占めているような人間だから当たり前と言えは当たり前である。

それなりに、いろんな人と関わりがあるため、情報網や顔のほうは広がったりする。

ただ、親友と呼べるのは俺ぐらいだろう。

境遇の似ている俺たちだからこそ…。

「おい、玲」

「玲君！着いたよ！」

二人の言葉に思考を戻すと、すでに見覚えのある灰色に薄汚れた校門前に到着していた。

「ったく、せつかく新学期だったのに何を考えることがあるんだ？」

「あ、分かった！玲君、クラス分けが気になってるんでしょ？」

クラス分け…そういや、二年の時だけクラス分けがあったな。

柊学園のシステムはクラス替えが二年の時に一回だけあって、そのクラス替えであと二年間のクラスメートが決まるというものだ。

「まあ、そんなところかな…」

「やつぱり！私も昨日から気になってなかなか寝付けなかったんだよね！」

「普通に俺が行った時、爆睡してただろ…」

「う、そ、それは…あ、頭の中であるちゃんが角を生やした睡魔さんにやられて…」

訳の分らないことを言い出した鳴実に苦笑していると奈緒が口を開く。

「それじゃ、三年は向こうみたいだからみんな、また後でね」

そう言い残すと三年はそのまま教室に行くため、校門から真っ直ぐ行はいる南玄関へ歩いて行く。

「そんじゃ、俺たちも行くか！」

遠ざかっていく奈緒の姿を見送り、今にも走り出していきそうな勢いの琉唯を先頭に、俺たち三人は、二年のクラス割り表が張られている東玄関へと向かった。

十

東玄関に行くまでの間に、俺たちはクラス分けの話題で盛り上がっていた。

「今年は、みんな同じクラスになるといいね」

「去年は俺と琉唯が同じクラスでナルだけが違うクラスだったからな」

「しっかし…中学からずっと八クラスある中で俺とお前は一緒のクラスだったよな」

そんな他愛もない話に、花を咲かしながら歩いているとあつとい

う間に東玄関前に着く。

今日は九時までに登校のため、八時過ぎだというのに玄関前には人影がない。

「お前の言った通りだったな」

「まあな、こういう日は少し早めに出たらほとんど誰もいないんだよ」

「それより、クラス分けクラス分け！」

緋色の髪をなびかせながらクラス分け表に突進する鳴実。

それに便乗して、琉唯も走り出す。

やれやれと心の中で呟くと、二人の後ろを歩いて着いていく。

学校の歴史自体は古いが最近改装した校舎は壁が白く真新しさが漂う。

玄関の壁には、後ろの方の人にも見やすいようにクラス分け表が貼られており、琉唯るいと鳴海なるみは顔を持ち上げ、表を見て口を開けたまま固まっていた。

「ナル、琉唯どうだ？」

「れ、玲ちゃん……」

声を掛けて、我に振り返り向いた鳴実はふるふると小刻こくちみに震えていた。

やっぱり駄目だったか……と考えると同時に、鳴実が口を開く。

「っ、っ、ついに三人同じクラスになったよー！！！」

その言葉の意味を理解するのにたっぷり十秒は要した、何回か鳴実の言葉を反芻はんすうし、急いでクラス分け表を見てみる。

ら行…ら行……

五十音順で並べられた八クラス分の名前の中で、自分の名前を見つけるのは比較的容易だった。

自分の名前があったのは、中間の左の表でC組と書かれた用紙の下から三番目に自分の名前を見つける。

そこから、徐々に上の方に視線を上げていくとそこには確かに桜^{さく}咲鳴^{らな}実と椎名^{しいな}琉唯の名前が隣合わせに書かれていた。

「やったな玲！ これは、皆勤賞ものだぜ！」

「やたー、やたー！」

よほど嬉しかったのか、琉唯は謎のガッツポーズのまま何やら叫んでおり、鳴実はというと雪の中を駆け回る子犬のように両手を挙げて走り回っていた。

「よかったな。それじゃ、後は教室で喜べ、そろそろ邪魔になるだろうからさ」

後ろの方を指差すと制服を着込んだ団体がやってているのが見えたので、俺たちはC組に移動することにする。

十

C組に移動して二十分ほどは、興奮した琉唯と鳴実が暴走していたが、それも三十分もすれば熱も冷めてきた。

「そんでさー、そいつは……」

ガラガラガラ

すでに、クラスメンバー全員が集まって騒がしくなった教室で、琉唯と話していると突然ドアが開き一人の男が顔を出す。

顔を出したのはちゃらつとした本当に教師か？ と思わせる風体

の男 杉下先生だった。

「もうすぐ始業式だ遅れないように来い。以上」

杉下先生は簡潔に用件を言い残すとドアを開けたまま立ち去る。

さすがは、簡潔かつ適当で名高い杉下先生である。そして、一年の時の俺と琉唯の担任だったりする。

杉下先生のことをよく知らない一部の生徒は、何が起こったか分からずに戸惑っている。

「そろそろ行くか？」

琉唯が席を立ち上がり、俺に答えを求める。

「ああ」

「そうだね」

「ナルお前どこから湧いてでやがった！」

さっきまでいなかったはずの鳴実の登場に、琉唯が狼狽する。

「湧いてないよ。向こうから来た」

「どこだー」

向こうから、と言いながら指を差さない鳴実に琉唯が頭をかかえて叫んでいた。

とりあえずどこからか現れた鳴実も連れて講堂へと向かう。

体育館並の広さの木色の空間に、長椅子がズラツと並んでいる

講堂。ここは、滅多に使用されることがなく、せいぜい月に一回か二回使われればいい方だろう。

主に、演劇部の無料公演会や英語部のスピーチ演説会などで使われたり、今回のように終始行式や卒業式などの行事に使われる程度。一番後ろの席に座り待つこと十分弱。ようやく、式が始まった。なんてことはない長い校長の話や新生徒会長の新学年も頑張ってくださいなどという話が延々と続く。

そんな中、俺の両隣では、自分の世界に入っている二人がもたれかかってまどろんでいた。

「……………スー……………スー……………」

「ZZZZ」

我慢の限界だったのか、ついに小さな寝息を立てて鳴実がもたれながら眠り始める。

琉唯に至っては最初の時点で本気で熟睡している。

涎よだれが口から出ていたりするが気にしないでおこつ。

二時間という、始業式としては長すぎる式にようやく解放され、ホームルームのためD組に戻ってきた。

ホームルームの時間は長すぎず短すぎず二十分程度。教壇^{きょうだん}では杉下先生が仁王立ちで立つている。

教卓の上にはプリントが山のように置かれているが配る気がないということとは、今年もアレをやるのだろうか？

琉唯の方を見ると、準備万端といった様子で椅子から腰を浮かしている。

「みんな知っていると思うが担任の杉下だ。一年間よろしく、以上でホームルームを終わる。各自プリントを取って解散」

その一言を言うと同時に教卓の前には人集り^{ひとだか}ができて混雑した。た。

さっさとプリントを取って早く帰りたいという、エゴばかりの連中が押し合いへしあいの大騒ぎだ。

自分の席から遠目にその光景を眺める。

杉下先生は、さっきの一言を言い残すと教室を出て行ってしまった。やっぱり、杉下先生だ。

「それ、お前の分だ」

「ありがとう、琉唯」

「そんじゃ、帰るか玲」

「ごめん、琉唯、ナル。俺、ちょっと用事があるから先に帰っててくれ」

「用事って？」

「去年から言われていたテレビの修理を鑑先生に言われてね」

「あー……」

俺の一言で、二人とも納得したように頷く。

「玲ちゃん昔から機械に強かったもんね」

「分あーたよ、頑張ってこい。じゃあな」

「ばいばーい」

「ああ、また明日な」

琉唯から貰ったプリントを鞆に入れ、二人に別れを言うと一人職員室に向かった。

Chapter 1 動き出した物語（前書き）

遅くなつてすみません。

かなり、付け足しや修正が多買ったので……。

Chapter 1 動き出した物語

職員室にきた玲は、廊下越しから鑑^{かがみ}先生の姿を探すが見当たらない。

「失礼します……鑑先生、どこに行ったか知りませんか？」

職員室に入ってすぐの席にいた学年主任に、鑑先生の行き先を尋ねた。

「えーと、鑑先生なら先に教材準備室に行くって言ってたよ」

「ありがとうございます。失礼しました」

忘れずに礼を言って職員室から出る。そのまま、身体の向きを九十度変えると教えられた三階にある教材準備室へと向かう。

鑑先生は一年の時の副担任で超が付く程の機械音痴だ。

以前にビデオデッキからビデオが出てこなくなった時に、解体してから取り出してあげたのが原因でそこから機械関係の修理、調整その他いろいろな機械関連の手伝いをさせられるようになった。

言わば、助手的位置とでもいうかそういう立ち位置になっている。機械を直したりするのは得意だし、嫌いじゃないから特に問題はないのだが、時たま、あの頃を思い出してしまう。

子供の頃のまだ玲や鳴実に逢う前の事だ。

機械を弄^{いじ}るのを始めたのは子供の頃からで、その頃の俺の友達と言ったら機械だけだったな、と一人懐かしんで苦笑する。機械を分解、組立るのが唯一の遊びでそれ以外は何もしない、そんな日々。そもそも、孤児だった俺は両親もいない何もなかったただの子供だった。それが今では昔の面影など、どこにもない普通の少年だ。

もしみんなに会わなければ、今頃は人知れず死んでいたかもしれない。そう思うと、アイツらに感謝の言葉を言いたくなる。

気が付くと、教材準備室前に立っていた。思考をこっちに戻し、軽く二回扉をノックする。

コンコン

「はい、どうぞ」

木製の扉から響く乾いたノック音の後から、去年からの聞きなれた鑑先生の声が聞こえてきた。

「失礼します」

ゆっくりと扉を開き、頭を下げて入室する。

中は、使わなくなった机に椅子や予備のそれが、教室ほどの広さの空間に詰め込まれていた。そんな中、鑑先生は俺たちにとって馴染み深い木製の学生椅子に座って本を読んでいた。

準備室に入るのは初めてではないが、昼間なのに薄暗く埃^{ほこり}っぽいのがどうも慣れない。

「龍宮寺君、来てくれてありがとう。早速だけどあそこにあるテレビを見てくれないかしら」

本から目を離し、軽く笑いながらこちらを見る鑑先生。

「分かりました」

プラグをコンセントに挿^さし電源を入れるが、うんともしない。

「どう？ 直せそう？」

「たぶん大丈夫だとは思いますが、中を見ないとわかりませんね」

「いつも、ごめんなさいね」

「いえ、暇だったんで大丈夫です。工具とかはありますか？」

「ええと、その机の近くにないかしら」

立ち上がり、しおりを本の間に挟むとパタンと本を閉じる。

「あ、ありました」

「あら。それじゃ、よろしくね」

そう言つと椅子に腰を下ろし、読書に戻ると静かな部屋の中に力チャカチャという金属音が響きだした。

作業すること一時間。

昼時を少し超えた頃に、鑑先生 麻里麼まりもが本を読み終わったのか、そのままボタンと閉じ、立ち上がり小一時間ぶりに口を開く。

「龍宮寺君りゅうぐうじ、そろそろお昼にしましょうか？」

「あ、そういえば……」

機械を直すのに集中して時間を確認するのを忘れていた。

ポケットから携帯を取り出し画面を確認する。

未読メッセージ二件という項目があり、その上に視線を上げていくとデジタル数字で十二時半ちよつとと表示されていた。

そのまま、メールボックスから新着メールを見ると差出人は琉唯とサイトからのメールだった。着信時間は双方とも五分ほど前。

メールを開き内容を確認する、午後からは暇か？ という感じの内容。

現在の修理の状況を考えて無理だと判断し、”ゴメン。ちよつと無理かもしれない……”と返信する。

もう一個のメールをちらつと確認して携帯を閉じようと手をかけたと同時に、携帯が振動して受取り画面になる。

着信メールを見ると、差出人は琉唯から……俺が返信してから時間にして三十秒足らずだというのに、もう返事が返ってきた。

了解！ 頑張れよ。

本文はそれだけで、文の横には絵文字が動いている。今度は返信なしで携帯を閉じ、鑑先生の方へ向く。

「それじゃあ、学食行って……」

きます。と続けようとしたが、口を閉ざす。なぜなら、目の前の机には二人分の弁当べんとうが並べられていたからだ。

「あの……これは？」

「あつ、これ？ 私が作った手作り弁当です。どうぞ食べてくださ

い」

「え、あ…ど、どうも……」

どうしたものかと悩んだが、あり難く^{がた}受け取ることにおく。

「はい、お茶です」

「あ、ありがとうございます」

非常に準備がよく、麻里^{まりも}麼が持参したらしきプラスチックコップに入ったお茶を受け取ると弁当箱を開く。

中には、卵巻やきんぴらごぼう、豚の角煮^{など}等のおかずが入っており下の段には日の丸ご飯が入っていた。

角煮を一口食べる。甘味が口の中で広がり、次に、良く煮込まれた豚の濃厚^{のちゆう}な旨みが口の中に広がる。

今まで食べてきた中で一番おいしいかもしれないと思う。

早食いをしたわけではないが、十分後には弁当箱の中は空になっていた。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

お世辞ではない。本当においしかったのだ。

「ありがとね」

「弁当を戴いたので、続きも頑張つてやります」

そついうと、気合いを入れなおしてテレビの後ろに回り、修理に戻る。

再びカチャカチャという音が響き始める。

十

日が傾いて部屋が少しオレンジ色に染まる頃。

「よし、終わった」

確認のため電源を入れる。すると、さっきまで映らなかったのが嘘のように何かのお笑い番組が画面に映った。

それを確認して、仕上げにカバーをプラスチックライバーを使い、慣れた手つきで閉める。

「ありがとう、お疲れ様」

「いえ、楽しかったので大丈夫です」

「それじゃ、また今度何かあったらお願いね」

「無理じゃない範囲ならいつでも……それでは、友人が待ってるので失礼します」

「さようなら龍宮寺君……くれぐれも気を付けて帰るのよ」

「心配ありがとうございます。さようなら」

笑って手を振る鑑先生。一瞬、先生の目が笑ってなかった気がするが、気のせいだろう。

一度、誰もいない教室に置いた荷物を取りに戻ると玄関へと向かう。

学校は、始まり一日目のため、部活をする人影もない。そんな、静まり返った学校から出ると家に向かって坂道を下って行く。

空はすでに茜色に染まっており、白い月と一番星が東の空で光っていた。

十

ふと、学校から少し離れた人気の少ない通路に来た時、自分の他にもう一人分の足音が付いてきているのに気付いた。学生ではない。午前授業日なので俺以外に残っていた学生がいるとは思えないからだ。

だが、軽く振り返っても誰もいない。しかしそれは、学校に続く坂道を下りたところくらいから一定の距離を保ったままぴつたりとついてきている気がする。

俺の気のせいだろうか。

そう考えることにして家への帰路を往く^い、しかし、頭のどこかで意識してしまつて無意識に足早になる。

朝の待ち合わせ場所に使う小さな公園が街灯の下、左手に見えてくる。

四月といっても、日の入りの時間はまだ早く、六時だというのに周囲はすでに真っ暗になっていた。

この公園を過ぎればあと少しで家に着く。

隣に公園が見えたと同時に全力で走り出す。

少しでも早く、この状態から抜け出したい。それだけが、玲の頭中を占めていて咄嗟の冷静な判断ができなかったのが仇^{あだ}となった。

玲が走り出すとほぼ同時に、後ろから全身を黒で統一した男が姿を現し、走ってきたのだ。

家に逃げ込めば大丈夫だ。と、自分に言い聞かせて全力で走る。

しかし、相手も馬鹿ではないようだ。見れば家の方からも同じく黒で全身を覆った男が走ってきていた。

「くそっ！」

そう吐き捨てると、住宅街の裏路地に入る。くねくねと幾つも分かれたり曲がったりした道を適当に突っ走っていく。

しかし、不思議なことに通行者の姿が一向に見えないのだ。

いつもなら、騒音を撒き散らすだけの暴走族も会社帰りのサラリーマンもこの路地に入ってから一向に姿が見えない。

その代り、後ろから俺の位置が見えているかのように男たちだけが追いかけてきた。

そのまま逃げて、辿り着いた場所は旧漁港。旧で分かると思うが、ここは現在使われていない廃港である。

元々この場所は盛んな漁港だったが、近年、工場などから出た排水や海に勝手に不法投棄して行く人によって水質問題が起こり閉鎖された漁港である。

今では、ほとんど人気がない場所^{ひとけ}で暴走族などの溜まり場程度にしかなくてない場所である。

「はあ…はあ…はあ……」

ここまで、全力で走り続けたため、膝に手を置き肩で息をする。それよりも、もっと人気のある場所へ行かないと。

旧漁港には東と西の二つの出入り口があるため、入ってきた逆の

西出入り口の方へ行こうとした時、前の方から一人の男が入ってくるのが遠目で確認出来た。

後ろに後ずさるも、元来た道はさっきの男二人ともう一人の三人いて、三人のうち一人は恰好から女だと推測できる。

四対一。絶体絶命である。さらに、相手は大の大人で動きからして、多分そういう道のプロとみて間違いないだろう。まともに相手をして敵うは^{かな}ずがないのは目に見えていた。

そこまで考えていると、酸欠だった頭に酸素が送られ出したのか思考がはつきりとしてくる。

そもそも俺が狙われる理由って何だ？

そう、今までは逃げることに手がいつぱいで気付かなかったが、よくよく考えてみれば俺だけをターゲットにして追いかけてきた。頭をフルに使い、追われる理由を詮索するが何一つ覚えがない。ただ、一つだけあるとすれば……俺の子供の頃の記憶である。

俺の記憶は、六歳の頃まではあるがそれ以降のつまり、六歳より前の記憶が全くないのだ。

俺が、孤児だったことと記憶がないことで以前、何らかの事故で両親を亡くして記憶をなくしたのではないかと調べたが、俺が生まれた年から六歳の頃までは全^{もっ}く以てそんな死人が出たような事故や事件はなかった。

しかし、今回のことは恐らく、亡くした記憶の中に答^{こたえ}があるのではないかと思う。多分間違っではないだろう。それくらいしか、追われる理由はないのだから……。

Chapter 1 壊された日常 (前書き)

遅くなりましたが、やっと直しが終わって投稿できるようになりました！
それではどうぞ。

Chapter 1 壊された日常

海を背にして東手に男一人、西手に男女合わせて三人が歩み寄って来ているのを横目に見つつ、身体はそのまま視線を彷徨^{さまよ}わせ、武器になりそうなものを探す。

男たちと違ってゆったりとした動きで女がその後ろから歩いてくる。その様子から、どうやらあの女が、首謀者のようだと推測はできた。

俺と男たちの距離が二十メートルほどに迫った時、後ろの女性が突然、腕を振り上げる。それと同時に、男たちが一斉に走り出した。

シャラン…… ジャキッ

服の裾^{すそ}から癖のある鎖^{くわ}独特の金属音を響かせ、刃渡り二十センチはあるんじゃないかというほどの大型のバタフライナイフを腕から手中に滑り込まして開く。その間、コンマ五秒。

明らかに、洗練された見事な動きでナイフを手に取りこんでくる。その刃は、新月の月明りの少ない闇夜でも禍々しい輝きを放っていた。

「くっ！」

必死に辺りを見渡して何か武器になりそうなものを探す。

すでに、二方からくる男との距離は十五メートルを切っていた。

絶体絶命の状況下、視界の端の四、五メートル離れた壊れたテナトの下に長さの違う大小の鉄パイプが二本転がっているのが視界に入る。

この状況を打破する方法はもはや、あれしかない……。

「一か八か！」

今まで動かなかった俺が、突然走り出したのを男たちが確認するとさらにスピードを上げて突っ込んで来た。

あと少しで、パイプに届くか届かないかの距離。
そして、今まさにナイフで切り裂かれる刹那……。

ガキイーイン……

鋭い金属音が両者の間で響く。

間一髪で滑り込み攻撃を受け止めるが、無理に攻撃を受け止めたため勢いは殺せずに崩れかけのテントへ転がり飛ばされる。

豪快にテントを薙ぎ倒しながら防護柵の方へと転がっていく。

さっきの衝撃でふらふらとする足でムリに立ち上がる。

追撃がなかったのが不幸中の幸いだ。もし、あの後に追撃されていたら今頃はあの世逝きだっただろう。

立ち上がり、口に入った砂を吐き出すのも束の間、その後ろから走り込んできた男が二人同時にナイフを突き出してきた。

俺の右手には半身ほどの長さのパイプ、左手には相手のナイフと同じくらいの長さのパイプをつかんでいる。

この状態なら！

双方からナイフが踊りくる瞬間。

右手のパイプは攻撃をいなし勢いを消し、左手のパイプはナイフに叩きつけて無理やり軌道を逸らす。

しかし、やはりプロか。残りの僅かな間に軌道修正をして制服を切り裂いていく。

もしこれが、左右逆につかんでいたらこうはいかなかったはずだ。仮に、左手に長いパイプを持っていたなら、左手はうまくいなし切れずに斬られていただろう。

男たちは追撃は無しにすぐさま距離を取る。

そのまま、得物を構えた状態で何かを待つように静止し続ける男たち。

両者の間にピアノ線を張りつめたような緊迫した空気が流れる。

玲の手はじつとりと汗ばんでおり、肌寒い風が首元を撫でるにも関わらず額からは汗の玉が絶えず流れ落ちる。

そういえばこの感じ、前にもどこかであったような気がするがどうしても思い出せない。

そう、おれが義理母に拾われるよりも前に似たようなことが……。俺の思考と緊迫した空気を破る声が男たちの後ろ　暗闇から聞こえてきた。

「いつまで待たせるの？　子供一人相手に何手間取ってるのよ」
声から受ける印象は俺の年齢に近い子供の声だ。しかし、あそこ
にいたのは大人に近い人物だったはずだ。

「すみません。マスター、少し油断しました」

男たちの内、代表して答えた男の声は暗く冷たく、まるでロボットの
のような無機質な声だった。

「そう、なら本気でもいいからさっさと殺^やっちゃいなさい」

「了解しました。マスター」

背筋に冷たいものが走る。それは電撃のようで、でも氷のように
冷たく、刺激、感覚……そんな言葉では言い表せないデジャブのよ
うな感じ……。

そう、簡潔に言えば恐怖。

そんな中、何かから身を守るように防御体制を取ろうとした
次の瞬間。

キンツ……グジャア……

突然の出来事に何が起きたか全く分からなかった。

ふと脇腹から太腿^{ふともも}を生温かいモノが伝う感触。手で脇腹を触ると
生温かいヌルヌルとした感じと共に錆びた鉄の嫌な匂いが鼻を刺激
する。

その感覚を感じてから斬られたというのを理解するまでかなりの
時間を要した。

幸い、あの時にガードしていたから良かったものの、あの時ガードしてなかったら今頃上と下はくつついていなかっただろう。

パチパチパチ

高く乾いた拍手の音と共に男たちの間から女が手を叩きながら姿を現す。

「龍宮寺君すごい、…でもさっきで死ななかったことをきつとあの世で後悔するよ？」

薄い月明かりの下、目の前に現れた人物を見て玲は目を疑う。

「か、鑑先生……？」

そう、目の前に現れたのはどう見ても鑑先生だった。しかし、あの時見た女のシルエットは子供ぐらいの大きさだったはずだ。

「半分正解、半分不正解」

突然、麻里麼が意味のわからないことを呟く。

…… 半分正解、半分不正解？ 一体どういう意味だ……。

「私は鑑麻里麼であって、鑑麻里麼でない……」

こちらの表情を覗いながら、薄い笑みをうかがへ話を続ける。

「本当の鑑麻里麼はもういない。でも、私の中に鑑麻里麼の記憶が残っている」

「っ！ ……それじゃあ、お前はいつたい何なんだ？ なぜおれを殺そうとする！ 鑑先生はどこだ！」

「そんな一気に質問しないでよ。そうだなあ、私たちはこの世界では悪魔と言ったところかな？ 先生ならもう存在はしないけど私の中に記憶だけが残ってるよ」

「……」

「あら、信じてないようね」

「そりゃな、いきなり私は悪魔ですって言われて『はい、そうですか』って言えるほど俺は馬鹿じゃない」

俺の言葉に驚いたのか鑑先生は表情を固まらせ次の瞬間には、

「……くつくつくつつ、あはははは……」
腹を抱えて笑いだした。

「あはははあ……いいねえ、この状況でその態度、非常に惜しい位だよ？ 上からの抹殺命令がなければ私の眷属にしたいくらいだもの」

「そりやどうも……」

「お前たちは手を出さないで」

「……了解しました。マスター」

麻里麼の一言で男たちは後ろに下がり手に持った得物を服の裾すその中へ片付けた。

「感謝しなさいよ。たかが人間相手に伯爵アールの私が直々に相手をしてやるのですから」

「鑑先生……」

「鑑先生ではないといっているでしょう。私には、シャロン＝ローズと言うすばらしい名前が付いているのよ」

そういうと、まるで霧が晴れるかのように、キラキラと粒子が消えて現れたのは最初に見たシルエットと同じ高校生くらいの年頃の綺麗な女の子。

「それで、何？」

「俺を殺す理由は何なのか聞いてない！」

「ああ……邪魔だからよ！」

口にすると同時にシャロンと名乗った少女が素手で突っ込んできた。

丸腰の少女に手を振り上げていいのか躊躇い反射的にパイプをクロスして防ぐ。

ペタッ

素手で軽く触れたただけなのに鉄パイプは意図も簡単に氷が砕けるようにバキバキと音を立てて崩壊した。

「っ!？」

その光景に驚きを隠せない玲。

目の前の少女は何をしたかでもない。ただ、素手で軽く触れただけである。

少女が触っただけでボロボロに砕け散り、手に残ったパイプの残骸^{がい}をただ呆然と眺める。

「ふふふ、それ私がやったのよ。大丈夫、あなたもすぐにそんな風になるから……」

「くっ!」

もはや、柄の長さほどにまで小さくなった二本の鉄パイプをおもいつきり少女に向かって投げつける。

もう、子供も大人も男も女も関係ない。向こうは本気でこっちを殺しに来ているのだから……。

シャロンは俺が投げた鉄パイプを避けることも防ぐこともせず、飛んでくるパイプに向かって手を突き出す。

やはりパイプは手に触れただけで、さっきと同じように崩れた。

「これで終わり、さようなら」

「なっ!」

玲の視界から目の前にいたシャロンが消える。

「チェックメイト。丸腰の弱者をいたぶる趣味はないから一撃で楽にしてあげる」

どこから発せられているのか分からずに、辺りを見るがシャロンの姿はどこにも見えない。

背後からシャロンの気配がするの気がつくがすでに遅かった。

ボン

俺の隣に歩み寄りつつ後ろに押し倒す。

「じゃあね。……あっ、そうだ」

パチンとシャロンが指を鳴らすと、玲の回りに光を放ちながら円

形の幾何学模様の魔法陣が展開された。きかがくもよう

「それじゃまた会えたら、その時はよろしくね」

「待てっ！ かはっ……ぐっ……」

喉の奥から鉛臭い匂いの液体がむせあがってくる。なまりぐさ

「つつ！？」

体の芯から沸騰したように熱くなって内側から何かが壊れていくのが分かった。

「ごめんな、みんな……」

それを呟くと同時に意識を失った。

「……マスター、彼に何をしたのですか？」

「ああ、あれね。もし彼に少しでも生きたいという意思があったら私の巻族悪魔に転生するようにプログラムした魔法陣……」

「それでは、他の魔族たちに……」

「いいわよ、一回殺したんだし。巻属になったら私たちに刃向かうことはまずない。何にも問題はないわよ」

「……分かりました。マスター」

Chapter 1 壊された日常 (後書き)

かなり改良を加えましたが……どうでしたか？
できれば感想などをお願いします。
では、また次回でお会いしましょう。

Chapter 1 新たな始まり（前書き）

遅くなってスイマセン。

保存していた文章が消えて絶望しながらももう一度、書き上げました。

最初とかなり内容が変わっていますが……（汗）
それではどうぞ。

Chapter 1 新たな始まり

暗い……絵の具の黒をぶち撒いたような闇の中。

”……ここはどこだ……”

何も無い……何も見えない 空間だけの世界。

見えるのは闇の中で薄く青白い光を放つ自分の身体だけ。

”？ ……唄が聞こえる……”

どうして？ 大切にしたモノは

いつも 壊れていくの？

失って気づいた カケガエの無いモノ

時間は戻らないのに……

どこからともなく耳に届いてくる唄は、今にも途切れてしまう細い細い糸のような優しく心に響く鎮魂歌。
レクイエム

詩に込められた思いは悲しくか細く、だけど力強い曲想になんと
メロデー

もいえない気分に関われる。

”……懐か……しい？”
耳を澄ますがあの唄はもう聞こえてこない。

その間に闇はうねり押し寄せるかのように侵食していく。

その渦巻く闇の淵で黒い何かが蠢いているような錯覚。
蠢

闇はまるで、生きているかのように少しずつ身体を蝕んでいく。

”！？ 待って、あと少し”

最初のはつきりと目視できていた身体はすでに首より下は闇に吞まれて見えない。

”もう少し もう少しなんだ！”

その時、頭の片隅に唄の最後が聞こえた気がした。

光と闇とともに……

その言葉を最後に俺の意識は闇に沈んだ。

ピチョン…ピチョン…

「…うつ…いててて…」

背中から伝わる硬く、ひんやりとした感覚を感じながら目を覚まします。

変な夢を見た気がするが、内容を思い出せない。

鉛のように重い身体を持ち上げ、上半身だけ起こすと身体の節々が悲鳴を上げ、痛みが走る。

しかし、その痛みはすぐに忘れる。なぜなら、今、自分がいる場所が知らない場所だったから。

「……ここ、どこだ？ ……」

自然と口からこぼれた言葉。

その言葉が差すのは、床から壁、天井と言った周りが全て、白一色で淡い光沢を放つ大理石で出来た、建物というより、中世の神殿を思い浮かべる造りの一室。

よくよく見れば、ところどころが天井から落ちてくる雨水で少し濡れており、苔が密集しているのが見える。

周囲を見回し辺りの状況を確認すると、自分が覚えている限りの記憶を整理してみる。

放課後に鑑^{かがみ}先生に呼び出されて、テレビの修理を

ここまではいい。問題はその後だ。

学校からの帰りに黒づくめの男たちに追いかけて、それから……

ハッと、右の脇腹を見える。

そこには、固まった血独特の赤黒いシミと鋭利な刃物か何かで綺麗に服を斬られた跡があった。

慌てて服を捲り上げるが、しかし、身体にはどこにも刃物で斬られた痕が残っていない。

……俺は、確かにあの黒い男の一人に深手とまではいかないが、傷を受けたはずだ。

それに、シャロンとかいう謎の力を持った奴に 殺されたはずだ。

夢では ない。その時の記憶も鮮明に残っている。

理解できない出来事ばかりで整理するどころかますます混乱する玲。

「一体どうなつてんだ……」

「その疑問、レナが教えてあげるのですよ？」

ふと、漏らした俺の一言に、あるはずのない声。

しかし、考えるのに集中してその異変に気付かず、返答する。

「ああ、頼む」

……あれ？ 俺、誰と話してんだ？

答えを返してから、今の状況に疑問を感じ思考を戻す。

さつき見たときは、部屋に居たのは俺だけだった……。

敵ならば、すでに奇襲をかけて攻撃しているはず……

しかし、確実に仕留められる実力者なら……

殺されかけた不安を拭いきれずに汗ばんだ手を握ると、ゆっくりと振り返る。

「……」

声が出なかった。

いや、別にあまりの光景にビックリしたのではなく、いや、正確にはそうかもしれないが……。

拍子抜けしたが正しいだろう。

「えーと、どこから話せばいいのですか？」

目の前には天真爛漫とした可愛い女の子が 宙に浮いていたの

だから。

年齢は……自分と同年の一六歳ほど。

セミロングの眉より長めの赤髪に、露出が多そうで意外と少ないラフな衣装。

膝丈より少し短いスカート、黒ニーソに目もやり場に困るが、すぐに警戒体制に戻る。

夢か、現実か、まだ分らないが、女子に殺されかけたのは真実なのだ。

「あつ！　まずはそこから説明しなければダメですね！」

まだ何も答えていないはずなのに少女は、こっちの言いたいことが分かっているかのように手をポンと打つと意気揚揚と話し出す。

「マスターは　一度死にましたのです！」

「……は、はい……？」

あまりに唐突な出だしに声がおかしくなった。

「だからですね！　マスターは一度、死んだのです！」

い……いやいや、いきなりこいつは何を言い出すんだ！？

死んだって？　え？　じゃあ今いる俺は？　いや待て……これはハツタリかもしれない。

「嘘でもハツタリでもないのです。事実なのですよ？」

「いや、ちょっと待て！　仮に俺が死んでいたとして、何で俺が生きていて、そんなことが分かるんだ！？　しかもお前誰だよ！」

「質問が多いですね……目の前に美少女がいるのですから、もう少し落ち着いたらどうですかマスター？」

「いや、自分で美少女とか言うなよ！？　てか、何でさっきから俺、マスターって呼ばれてんの！？」

すでに脳は理解許容範囲を超えており、言わばオーバーヒートを起こしているため正常に機能していないといってもいい。

「まあ、一つずつ説明していくのです！　ていつ……！」

傍から見れば回路がショートして煙を上げている。という表現が

ぴつたりな状態の俺に鋭い平手打ちが振り下ろされる。
チヨップ

痛っ！？　じ、地味に痛かったぞ今の……。まあ、霊体ではないという収穫はあった。役立つのかは別としてだが……

「最初に、マスターは死んだといいましたが……これは真実であり事実です」

「いやだから、お前誰」

「今、説明中なのです！」

もういいや、これはあれだ……。言っても聞かないタイプの奴。構っているだけ時間の無駄だな。

「……仕方ないのです……。レナの名前はレナ＝アイリス、パラサイティアなのですよ……」

「ぱ、パラサイ……」

「寄生型人種ヒモなのです。言うなれば寄生人間ヒモってとこなのです」

ズザ　　ッ……！

ボルトも顔負けの音速に近い電光石火で一気に壁際まで避難する。寄生だとっ！？　本当かウソか知らないがそれだけは嫌だ！！

「……ハア……。予想通りのリアクションなのですよ……」

「当たり前だ！　寄生されるのにいいことなんてあるかつ！？」

「……助けてあげたのになのです……」

「…………い、今何て？」

「助けてあげたのに？」

も、もう意味が分からん！　助けた？　死んだ？　どっちなんだっ！？

壁際で頭を悩ませる玲にレナが説明に戻る。

「……まず、マスターは黒い男たちの一人にダメージを負いましたのですが、今はその傷はないのです。次に、マスターはシャロンと名乗った悪魔に殺されたのです。でも、生きているのです　ここまで間違ったところはないのですか？」

「ああ、その通りだ」

大まかな流れだが、名前とかは間違っていない。むしろ、見ていたんじゃないかと思うくらいだ。

「そして、シャロンの不思議な力によって死ぬ前にショックでマスターは気絶したのですが、どうやら死んでから一定期間内までに本人　つまりマスターが生きたいと願った時に発動する悪魔への転生魔法陣が気絶中に誤作動したのですよ」

「て、転生……」

胡散臭うさんくさそうな話なのにてつきり、本当じゃないのかと思ってしま
う。

「転生すれば、マスターは悪魔の眷族　早い話が奴隷としてその
身が朽ち果てるまで仕え続けることになるのですよ」

暑くないのに汗が伝う。

つまり、俺が生きているのは転生したから　つまり、殺された

悪魔に身を捧げなければいけない……

イヤだ。そんなのはイヤだ……

「信じる、信じないは自由ですが、最後の説明なのです。今までで
ここが一番肝心の内容なのです」

そう前置きをすると、レナは驚くことを話し始めた。

Chapter 1 新たな始まり (後書き)

次回は、早めに仕上げたいと思います。
では。
感想とか、あればお願いします。

Chapter 1 パラサイティア（前書き）

少し遅くなりました。

最初の原作とズレてきていますが……気にせずどうぞ。

次回は遅くなりそうです。

では、どうぞ。

Chapter 1 パラサイティア

参考程度に話を聞くことにする。

まだレナが味方だという保証はないが、今の状況じゃ彼女と自分以外に頼れる人がいないのだから。

「転生したらマスターは眷属悪魔になるのですよってレナは先に言いましたのすよね？」

「ああ」

少し前の会話を思い出して頷く。

「それでは、マスターに質問なのです。転生したのにマスターは悪魔じゃないのはなぜなのでしょう？」

あつ！ 確かに、レナの今までの説明では転生したから死んでここにいてることである。ならば、眷属悪魔に転生しているということだ。

しかし、レナの言う通り、自分の身体にはこれといった変化が見当たらない。

言うなれば、傷が消えたことくらいだろうか？

「……分からない」

「にやははっ……それがなんと、レナのおかげなのですよ!!」

人懐っこい笑みを浮かべると手を上に上げて変なポーズを決める。

「レナが寄生型人種パラサイティアだったからこそできた芸当なのです!」

そういえば今さらだが、レナって胸小さいな……パツと見るとそうでもないのに。

ドスンッ……

鈍い打撃音と鋭く身体に走る衝撃。

「っ　!？」

突然の出来事に一瞬思考が止まるが、攻撃主の方へゆつくりと視線を移す。

そこには、すこし歪いびつな人懐っこい笑顔で見下ろすレナの姿がさらにアニメ風に言うなれば青筋が浮かんでいる。そんな顔

「何かありましたのです？」

ニコニコと笑っているがその後ろには、空間が揺らいで牙を剥いたトラが見えた気がする。

「えーと？　　れ、レナさん……さっき」

「何か。　　ありましたか？」

あ、悪魔だ……。目の前に悪魔がいる……。

「い……いえ。な、何にも……ありません。……せん。でした」

罪のない一般ピーポーはこうして権力に屈するのか……
権力社会の事情を垣間見たような気がした。

「続けるのですよ……」

『これが今度のマスター』なのですかと小さく呟いたが、玲の耳には届かなかった。

レナは「ええつとなのですね」と前置きをするとパラサイティアについての説明とこの世界についての説明を始めた。

この世界は、俺のいた世界の裏側にある世界だそうで、科学と魔法が発達した世界　　ハーツなのだそうだ。

さらにこの世界、ハーツでパラサイティアという人種は、どこから、どのようにして生まれてきたのかもわからない新しい人種で、寄生型以外にもいくつか型があるらしく、細菌型バイルスや憑依型ゴーストなど、いくつかの種類とゲームやマンガの世界などでしか知らないというか聞いたことがない、妖精フェアリーや獣人ドワーフ、森人エルフなどの人ではないが近い種族もいるらしい。

で、レナたち寄生型はそういう人種の中で最も優秀な人種なのだそうです。生存条件が非常に難しい。

自分でエネルギーを生成できないため、宿主が必要になってくるが、寄生可能条件が『瀕死以上、死亡未満の状態の人間であること』

なのだ。

自分の意志だけで寄生することも可能だが、契約を結ばなければ完全寄生できない。さらに、宿主がいない状態が三日間続けば、死んでしまう。そんな、人種。

「これが寄生型人種なのですよ……」

時間にして約十分ほどの講義を終えるレナ。

「それで、本題ですが。宿主がいない日が三日目で死にそうだった時にマスターが現れたのですよ！」

レナの話だと。

パラサイティアはこっちの世界から俺たちの世界に精神移動ができるらしく、死ぬ前に向こうの世界、つまり俺のいた世界を見たいと思い、移動すると必死の形相で走る学生　俺と黒い男が追いかけているのが見えた。

それが気になり、フラフラと追いかけてきたはいいが、相手が悪魔　こっちの世界では魔族と言らしい　であつたためレナではどうすることもできずただ影から見守るだけしかできなかった。

そうこうしているうちに、俺はシャロンに殺された。

正確にはまだ殺されていなかったようだが、シャロンが去り際に仕掛けた転生魔方陣が誤作動したため、そこで俺は完全に死んだ。

パラサイティアの寄生条件が瀕死以上、死亡未満なので、シャロンに殺されかけた時にも助けられたようだが、転生魔方陣が展開されたのを見て、『どうせなら、宿主は強かつたほうがいいですよ！』的な私欲にどこぞのバカが突つ走つて、瀕死状態ギリギリで寄生したため今に至る。

「あつ、言い忘れてましたのですが、ギリギリで寄生したので寄生可能許容範囲を少しでも越していたら二人ともさよならだったのですよ！」

「……アホかつ？！　無事成功したからよかったものの失敗してたらどうすんだ！」

「い、いやゝまあ……成功したからいいんじゃない……ですか？」

「はあ……もういいや、済んだことだし。それよりレナ」

「……無理ですよ。元の世界に帰るのは」
「なっ。こいつやっぱり俺の。」

「そうなのです。レナたちパラサイティアは宿主と精神リンクして
いますので考えていることも筒抜けなのですよ」

その言葉に玲は、「やっぱりか」と肩をすくませる。

「で……なんで俺は元の世界に帰れないんだ？」

「純粹な疑問。そういえば、いつの間にか信じてる自分がいる
ことに気付き苦笑する。」

「ええとですね。一つは、マスターが純粹な人じゃなくなったから
です」

さらに、一つはということとはあと何個かは理由があるはずだ。

少し悩むが答えが出るわけもなく、レナに答えを尋ねる。

「まあ、今までの話が本当ならそうだけど……それとどんな関係が
？」

レナは『ふふーん』と鼻で笑うと口を開く。

「マスターは転生途中でレナが寄生したので半分人間、半分魔族に
なったマスターは魔力が普通の人と違うので魔族に搜索されやす
なっているのです」

「ええと……魔力って、魔法とかのあれ……だよな？」

「あつたりまえです」

だから、そんなない胸張って。

ガツンッ

「くう　っ。そうだった……」

こいつには、考えが筒抜けだったんだ……。

真剣な表情でしゃがみ込む俺の顔を見つめる顔。

「いいですか？　殺されたのに、死体がないのですとか、転生もし
てないということが分ければ、今度は間違いなく抹殺されるのです」

その眼は、同一人物とは思えないほどの真剣な鋭さで見下ろして
くる。

「……それが、マスターだけで終わるならいいですが、最悪……生前にマスターと関わった人全ても対象に抹殺許可が出されるかもしれないのですよ」

俺と関わった人……。

真っ先に思い浮かぶ、三人の顔　鳴実に琉惟、そして、奈緒。

あの三人がいたから俺は今ここにいます。あいつらがいなかったら、合わなかったら、俺は人知れず死んでいたかもしれない。

あいつらがなくなったら、生きて行けたかもしれない。

所詮。赤の他人なのだから。

でも、だからと言って切り捨てることもできない。

なぜなら、初めてできた。俺の大切な家族みたいなやつらだから

「レナ……」

「何ですか？」

「俺が……俺が、元の世界に帰らなければ問題ない……よな？」

何かを犠牲にしなければいけないのなら……俺は自らを犠牲にすることを選ぶ。それが、みんなへの恩返しだから。

「……当分は問題はないと思うのですが……おそらく、特に意味はないのです」

「え？」

「やつらが本格的に動きだしましたので、そう遠くない未来にあの世界は魔族によって滅ぼされるのです」

い、今、なんて……

「マスターのいた世界は原初の状態　つまり、一からやり直しになるのです。古代文献では『魔により表界^{ひょうかい}式度、原初に帰^きす』とあるので今までに、二回は滅んでいるのですよ」

レナの衝撃的な告発に俺は、その言葉をただただ聞くしかなかった。

Chapter 1 パラサイティア（後書き）

上記に記しましたが、もう一度表記します。

次回は遅くなります。

理由は、テストにレポートその他諸々の理由なのでご察してください。
い。

では次回また会いましょう。

Chapter 2 鬼ごっこ (前書き)

自分で言うのもなんですが……

……風呂敷広げすぎました。

ここまで、少し設定変えるだけで物語って大きく変わるものなのかと物凄く実感しすぎて死にそうです。

ではどうぞ……

Chapter 2 鬼づつこ

……俺は何をしているのだろうか？ いつになったら元の生活に戻れるんだろう？

それはまあ、置いてくとして……

なぜ俺はいま

ドラゴンに追いかけられているんだ！？

「マスターっ！？ 危ないですって！！ うう、こうなったら行っけえマスターなのです！！」

そんなこと言われてもついさっきまで、一学生だった俺に何をしろと！？ しかも、丸腰。

「当たって砕けるおなのですっ！！」

「砕ける前にぐちゃっと逝くわ！？」

レナの回蹴りを反射的にかわしながら走り続ける。

なんだかんだ言っつて、小一時間ほどこのバカ広い神殿みたいな建物の中を走り回っていたわけで。

やばい。だんだん息が苦しくなってきたぞ。

半人つてのもここが俺のいた世界でもないというのもウソでもないようだ。

普通の人間が全力疾走を一時間ぐらい持つわけがないだろうし……

何しろ、ドラゴンに追いかけてるんだから！

何でこんなことになったんだろうな。

ああ、確か……。

……。

……。

。

十

「というわけでマスター！　これからよろしくなのですよ」
ええ。

「それでは、本契約を……」
やだ。

「まあーすうーたあー！」

思ったことを読まれるって声出さないでいいから楽だよな。ん？
レナくんその振り上げた腕は

ガツンッ

「いつてー！？　おや　」

「親父にも殴られた以下略はなしなのですよ」

前言撤回。やっぱり心は読まれていいものではないな。……あ、
言葉にはしてないか。

「はあ、マスターに本契約をするつもりがないなら仕方がないので
すよ……」

虚空に浮いた少女が腕を組んで悩んでいるという傍^{はた}から見れば奇妙な光景。

しかし、散々不可思議な現象を見てしまった今の自分には何も奇妙なことだとは思わないのが、悲しくなってくる。

だが、これで彼女も諦めてくれるだろう。

「……マスターが認めてくれるまで待ちますですか」

ズガッ！？

コケた。いや、何もないところで転ぶことってできるもんなんだな。

「同感なのですよ」

いまはそれほどじゃない。い、今なんと……。

「マスターのヘタれ度の高さには同情なのですよ」

「いや、なんかさつきと思いつきりセリフ違うし！！俺はヘタれじゃないし、同情されたくもないっ！」

どこから出てきたヘタれに非難の声を上げる玲。

「ヘタれはみんな最初はそういうのですよ」

「いやいや、『犯罪者はみんな最初はそういうんです』的なノリで言われても知らないよ。第一どこにヘタれ要素があった！？」

「レナみたいな美少女が本契約をお願いしてるのにOKしてくれないのですよ」

「だから、自分で美少女言っとなっ！！」

まあ、確かにレナは可愛い、口を開かなかっただけだ。

「よし、マスター攻略まであと少しなのです！！レナは待つのですよ。ヘタれマスターの攻略のために！！」

「だから俺はヘタ……じゃなくて！？何その流れ！？何で待つんだよ！！契約か何か知らないけど俺はそんなのするつもりはないぞっ！！」

「な、なんでなのですか！？レナの予想ではマスターはレナの魅力で平伏しているはずなのにです……！」

「いったいどこからその自信がわいてくるのだろうか。コツがあればひ教えてもらいたいものだ。」

「ん？」

気付くとレナはジトと汚物でも見るような蔑^{さげす}んだ目で玲を見ながら。

「ヘタれなのです……」

と聞こえる程度にボソリと呟いた。

「……」

「ヘタれなのです……」

「……」

「ヘタれなのです……」

「……」

このままでは埒が明かないと悟り、大きなため息をつき。

「……まあ、とりあえずは一緒にいてもいいぞ……」

彼女の同行を許可することにした。

なんだかんだ言っ、助けてくれたのは彼女だ。

契約をするつもりはないが、一緒にいるぐらいならいいんじゃないだろうかと思うし、ここで追い出して、三日の間に瀕死状態の人に会える保障はないのだから。

「んー……まあ、マスターの言い分ももっともですね」

「……そんなことも考えてなかったのかよ……」

レナの言葉に軽く嘆息する。

「あははは……居候許可をもらったしとりあえずここから出るのですよ」

レナはかわいた声で笑いながら、この部屋から出るためのドアを指さすのだった。

部屋の外は思っていたほど立派な造りではなく、装飾などない迷路のような入り組んだ構造になっていた。

それでも、やはり壁は大理石で作られていて広さも十分にはある。といっても、さほど広くはなく五人くらいなら横に並んで移動できる程度の大きさ。

神殿か何かと思っていたけど、遺跡か何かなのかも知れないな。

「そうなのですよ。ここは、魔法学院直轄の遺跡なのです」

よく分からないがそういうことらしい。

正直、そんなこと言われてもいまいちピンとこない。

「そついや、レナ。その、パラなんとかってのはエネルギーを他人からもらって生きるってことは、今も俺からエネルギーかなんかを吸い取っているのか？」

少し前からあることに気付き尋ねる。

「そうなのですね」

さっきから気になってた空腹感はそのためか……。

「ちょ、ちよっとマスター！ 心外なのですっ！！」

「??」

少し頬を膨らませつつ、中腰の状態の下から顔を覗き込んでくるレナ。

ヤバっ！！ 可愛い……。などと、思った瞬間。

レナの顔が、ボンッ！ という音が聞こえてきそうなほど顔を茹でタコのように真っ赤に赤面する。

あー……なんか反応が可愛いというか面白いというか、見てて楽しい。

パガンッ！

亜音速に近い速さでGパンが頭部にクリティカルヒットする。

「いってー！？」

「マスターっ！！ ふざけないでくださいなのです！」

真っ赤な顔で言われても全く恐くないが。

「わ、悪かった……」

と、殴られた部分を抑えながら謝しておく。

ふざけてはなかったのだが、確かにさっきは俺が悪かったと思う。

「全く今度のマスターは」

と俺が謝ったにもかかわらず、当の本人は、何やらぶつぶつと俺についてのグチらしき言葉を呟いていた。

「あー、レナ？　で何か言いたいことがあったんじゃないのか？」
「あつ、そうでした！！　全部マスターのせいなのですからっ！！」
「す、すまん？」

いったい何の事を言っているのか分からないが、これ以上面倒事はいやなので謝る。

「で、レナたち寄生型人種パラサイティアはマスターの魔力などを糧かてにして生活しているのですよ」

「へー魔力か。……って、魔力っ！？」

軽くスルーしかけた単語に食らいつく。

「え！？　でもそれって、俺でも魔法が使えるってことか！？」

「可能性は0ではないですが、難しいのですよ？」

この言い分だったら無理と言ってくれた方が嬉しかったかもしれない。

できると思っていたけど無理でした、なんて言われたほうがショックが大きいからな。

「まあ、こんなものなのです」

レナは両手で優しく包みこむようにして、掌に意識を集中させる。その光景を眺めていると、その手の間からこぶし大の火の玉が出現した。

偽物でも何でもない炎。

炎の熱がこつちまで届いてくる。

「そして、これが魔力に相反する沁力あいはんなのです」

今度はそれを片手に取ると、もう片方の手をその炎の中に突っ込んだ。

下手をすれば大火傷おおやけど、そうじゃなくてもかなりの火傷やけどは絶対だろう。

炎の中に突っ込んだレナの手の手心配をしながら静止した炎を見つめる。

炎が……揺れていない？

よく見るとレナの手に乗った火の球は燃えていた時と同じ形を保

「たまま凍^こっていた。」

いつの間にか、炎に入れていた手を何事もなかったかのように引き抜いていた。

「ざつとこんなものなのです」

そんなにない胸を強調したいのか、胸を張るレナ。

「死に晒^{さら}せなのですーっ!!」

手に残った世にも珍しい凍った炎を全力で投げつける。

「死んでたまるか!」

素早く横ステップでいとも簡単に躲す玲。

その数秒後、後方から何がどうなっかさっきの炎の塊が爆発した音が聞こえてきた。

あ、危ねえ……もし当たってたら冗談抜きで消し飛んでいた。

ゴオオオオオオ

地の底から突き上げるような咆哮がどこから響く。

「マスター!! めちゃくちゃ怒っているのですよ!?!」

ああ、めちゃくちゃ怒っているのは分かってる。 さっき殺されかけたからな。

「そうじゃなくて!!」

怒ってるのか、慌てているのかどっちかにし。

思いきる前に、レナの強烈なタックルで数メートルほど弾き飛ばされる玲。

「いててて、何なんだよ一体」

勢いのあまりさらにゴロゴロと転がっていき、三メートルほど転がったところでようやく起き上がる。

次に見たのはレナの怒った表情でもなく、笑った表情でもなく……。

さっきまで自分がいた場所が抉^{えぐ}れている光景。

……と、無駄に血の気の多そうな恐竜? いや、恐竜は口から火

は出ないな……ドラゴンっ!?

「そんなことより、レナは!？」

突き飛ばされた場所には今は誰もいない。ただ、大きなクレーターが口を開いているだけだ。

あんな奴でも、いなくなったら……

「呼びましたのですか？」

……………?

「何なのですかその間は!!」

な、ナンデモナイヨ。

「まあ、いいのです。レナは寛容な心を持つ……」

「美少女はなしだ」

「うつ……、そんなことよりさっさとツラかるのですよ!」

こんな感じで、小一時間に渡る鬼ごっこが始まったのだった。

Chapter 2 鬼ごっこ（後書き）

はい、もう死にそうです……。

この話を書くのだけで一週間ちよつと掛かりましたから、作家さんってえらいですね。ちよつと尊敬できる職かもしれない（笑）

さてさて、またまた無駄に風呂敷を広げた感がぬぐえないのですが……

うん。気のせいでしょう（汗）

こういう時こそ『助けてえーりん』と叫ぶべきですよね？
え？ 違う？ じゃあ、現実逃避で……。

……それもダメって誰かに言われたので……読者に見放されないように書きますか。

あー……無駄に徒然^{つれづれ}と書いただけの作者でした。
ではまた次回で。ノシ

Chapter 2 仮パーティ（前書き）

自分の予想以上に早くできたので投稿します。
ではどうぞ。

Chapter 2 仮パーティ

「で、どうするんですか？ マスター……」

「そんなこと、俺に聞くな……」

もう何回このやり取りをしただろうな？

ぷるぷる　ぷるぷる

ようやく、ドラゴンからは　ぷるぷる　逃げ切ることができたが
ぷるぷる　これはどうしたものか　ぷるぷる　。

「だああああっ！！　ぷるぷるやかましいぞっ！！」

ぷるぷる　ぷるぷる

行く手にはスライム、スライム、スライム右を見れど左を見れど
スライム、スライム。

スライムの山々。その中央部の安全地帯に立っているのだ。

情けない話　落とし穴に落ちました……。

いやまあ、それでドラゴンの追撃を避けられたのは幸運と思うか
もしれないが、その後の話がこれまたひどい。

スライムの要塞に取り囲まれたわけで……落とし穴の出口に行こ
うにもスライムが塞いでしまっているわけで。

二十分近く立ち往生しているという有様。

いっそ、この山を掻き分けて行けばなんとかなるんじゃないか？
という考えしか至らない。

「スライムに潰されて死にますのです。スライムに殺された男とし
て後世に語られたければどうぞなのですよ？」

却下。じゃあ上って行けば……

「スライムの上を登れるとでも？」

……。ムリだな。じゃあじゃあ、レナの魔法でこうババーンと蹴散らせれ……。

「マスターもとばつちりを受けたいのであれば……」

「ごめんなさいっ！？ ウソです！ すいませんっ！！」

何やら怪しいことを始めたレナをやめさせる。

打つ手なし。まさか、スライムがこんなに強いものだったとは……。

スライムに対しての認識を改めなければいけないと考え始める始末。

「電気さえあればなんとかなるのですが……あいにく生憎、レナは電撃魔法系はからつきしなのですよ」

「電気だとなんかあるのか？」

「はい。蒸発するのです」

じよ、蒸発。そりやまた、すさ凄まじい。

「炎でもできるんじゃないのか？」

「一瞬で蒸発させるほどの火炎系は覚えてないのですよ！ それと、もしそれやったらマスターも丸焦げです」

電気が元の世界なら無限じゃないけどたくさんあるのにな……いや、ちよつと待て。ここに電気はあるじゃないか！！

ポケットをガサゴソと探ると、画面部分とボタン部分の二つに分断された携帯電話の残骸が出てきた。

「……………なぜ……………真つ二つ？」

「マスターどう……………したのですか？」

俺がポケットから何かを取り出したのに気付いたレナが手の中のものを覗き込んだ。手の中のものを見たとき不自然に言葉が切れたのはなぜか？

「れえなあーっ！！ お前かああああ！！」

「ご、ごめんなさいですううううううっ！！？！？」

慌てて逃げようとしたレナの襟首をつかみ、空いた方の手でグリ

グリと頭をどつく。

「マスターが気絶している間に暇で暇で死にそうだったので勝手に触って壊してしまいましたのですううう」

「お前はウサギかつ!？」

実際は、ウサギは寂しくて死ぬというのは嘘話^{デマ}で、ウサギは寂しくても死ぬことはない。つまり、ウサギ以下ということになるのだが、この際細かいことは気にしない。

「はあ、もういいよ。過ぎたことは仕方がない」

壊れた携帯電話から電池パックを取り出す。

結局、電池量は確認できないが、電気が残っているのを祈るだけだ。

「これに電気が入っているんだ。……そら」

不思議そうに携帯から取り出したそれを見つめる。

「じゃあやってみるですよ」

ぷるぷると震えているスライムの側^{そば}に行くとそのまま突っ込んだ。

……………

……………

……………

数秒が過ぎても何も変化がない。

「やっぱ電池切れだっ」

たのか、と言い切る前に異変が起きた。

さっきまで千変万化に形を変えていたスライムたちの動きが突如、止まったのだ。

そして、ゲル状だったのが徐々に形が崩れていき……………。

「お、おい…………レナ、これってまずいんじゃないか？」

「ど、どうやらあの程度では電力不足だったようなのですよ」

なんじゃそりゃあああ!？ とツツコミを入れる間もなく元スライムだった液体に呑み込まれた。

「っ、けほけほっ……あーひどい目にあった」

呑み込んでしまった水に近いそれを吐き出して上体を起こす。

「あ、マスターが気が付いたのです!」

「気がついたわね」

あれ? 前者の声はレナの声だけど、その後の声は誰だ?

そんな疑問を感じつつ声のする方へ顔を向け……

ゴスッ

……る前に、首がもげるのではないかというほどの衝撃が側頭部を襲い、仰向けに倒れる。

そして見たのは、どこかの学園の制服と思われるピンクのセーラー服にスカート姿で華麗に回し蹴りをキメ、スカートをひらめかせたグレーの髪の美少女。

どうやら、俺を蹴り飛ばしたのは彼女のようなのだ。

あまった遠心力で一回転すると、まるでそれが当たり前かのように腰のあたりに手をおき、さまになったポーズをとる。

言うなればよく高飛車お嬢様系の少女がとりたがる謎の姿勢。

何やらいやな予感がする……

いきなり蹴り飛ばされて睨みつけられている状態で、何も無いわけがないのだ。

「あんた、なんてことしてくれるのよ!」

「はあ?」

一体全体、意味がわからない。どこに俺が見ず知らずの少女から怒られる要素があるんだ?

「はあ? じゃないわよ!! 部屋のドアを開けたら、いきなり鉄砲水に襲われて、パーティとははぐれるし、部外者はいるしで何なの!?!」

かなり、ヒステリックになっているようなのであまり刺激しない

ように距離を置いて話を聞く。

「はああ……というわけで、この遺跡を攻略するのに一緒に一時的にパーティを組んでもらうわよ」

「分か、って……はああ！？」

「はああ、うるさいわね。あんた、それしか言えないの？」

「いやいや！？ 何その流れ！？ 何でこつも俺の周りに寄ってくる女はこんな、自分勝手な奴らばかりなんだ！？」

「ちよつと、マスター！ それじゃあ、レナもユリナちゃんと一緒ってことになるじゃないのですか！」

「そういう意味で言ったんだけどな。あとその子、ユリナっていうのか……」

「そついや、自己紹介がまだだったわね。レナちゃんが言ってた通り、私はユリナ。ユリナ「マクスウェルよ」

「俺は龍宮寺玲だ。玲でいいぞ」

「レナちゃんからあんたの事は聞いてるわ」

「なんだ、俺が気絶しているうちに仲良くなつてたのか。しかも、あんたって……」

「しかし、あんたも不運よね。魔族に殺されかけて」

「？ レナの奴、俺が半分魔族だつてこと言っていないのか？」

（この世界と魔族は敵対関係にあるのですよ。なので、マスターが元は純粋な人間であろつとむやみに半魔族であることを明かすのはあまりよろしくないのですよ）

俺の耳元でレナがぼそぼそと呟いてくる。なんだかんだいって俺の事を心配してくれて……

（マスターが危なくなつたらレナまで危なくなるじゃないですか！）

あ、はい。そういうことですか。

「ほら、さつさと行くわよ！」

自分勝手な二人の女子に挟まれて、売られゆく子牛や死刑宣告された囚人もこんな感じなのだろうかと思うしかなかったのだった。

Chapter 2 仮パーティ（後書き）

やっと本編らしくなってきた気がする。

さてはて、何を語ったらいいのやら……

現在、風呂敷の縮小計画を考案中。

どこまでいけるか分からないけど頑張ってみようか？

さてここからどうなることやら……。

ではまた次回会いましょう。

Chapter 2 想い

連行に近い形で連れて行かれること十分弱。

スライムやスケルトンといったモンスターの屍を踏み越えようやく落ちついた部屋に入ることができた。

ちなみに、倒したのは俺ではなくすべてユリナだ。

戦闘経験のない俺に前衛を任せられないと踏んでか、後衛の見張り荷物持ちを任されていた。

いや、十中八九荷物持ちをさせただけだろ！

ぶつくさと文句を呟いていたら二人に殴られたし、何この理不尽な扱い。

「ふー。やつぱり一人はキツいわね」

そう呟き、キラキラと光る額ひたいをタオルで拭くと床に腰を下すユリナ。

お前、素手で一撃だったじゃねーか！ 俺の方が絶対キツいよ！
とは言えない。てか、言ったら確実に殺される。

「ん？ 何？ 俺の方がキツいつて表情かおしてるわね」

「な、なぜバレた！？ と、とりあえず話題を変えなければ！！」

「な、なあ。この遺跡ってなんなんだ？」

自分でもベタな話題の変え方だと思っ。

「ん？ そんなこと聞いてどうするのよ？」

「いや、レナからは学園の持ち物としか聞いてなかったからもう少し詳しく聞きたいだけだ」

俺の言動に裏は無いと読んでか、ユリナは案外あっさりと口を開いた。

「この建物はローレシア魔法学園マジックアカデミーの直轄遺跡で元は普通の遺跡だったけど、難易度が優しすぎて今では学園の戦闘実習場になってるわ

けよ」

「ということは、ユリナが今ここにいる理由は……」

戦闘実習のためか。

「そういうことよ」

それで、自分の役目は終わったとばかりにユリナは視線を外した。ふう、とりあえず一難は去ったようだ。

「ちよつとマスター！？ このレナ様を差し置いてユリナちゃんをたぶらかそうなんて三ヶ月と二週間早いのですよ！」

「ちよつと期日がリアル……じゃなくて！ たぶらかすって何だよ！？ それと自分で様付けすんな……！」

ああだこうだと隣でうるさく怒鳴り合っている間、ユリナは思っ
のだった。

何者にも染まらない彼が羨ましいと……

そんな彼を巻き込んでもいいのか……騙だましていてもいいのか……

その答えはでなかった。

もうしばらくして、三人はそこから腰を上げた。

「今いるのが、第五階層よ。この遺跡は全十階層だから半分の地点になるけど……ここからモンスターのエンカウント率が上がってくる。気をつけてよ」

「おう」

「了解なのです」

ここまで来ると、神殿つて感じよりダンジョンと言ったほうがしっくりくるような感じになってきていた。

あちらこちらに、魔物との戦闘の傷跡で大理石の壁が抉られていたり穴がぽっかりと空いていたり焦げていたりする。

もはや、大理石の淡い光沢もなく迷宮の戦場のようだ。

この階を歩くこと三十分弱。一行はモンスターにほとんど遭遇することなく階段の近くまで到着した。

「思ったほどいなかったのですね」

レナが期待外れといわんばかりに声を出す。

「まあ、その方がいいんじゃないか？」

戦うよりは幾分かマシのはずである。

「ええ、そうね……」

ユリナの反応は素気ないもので、少し拍子抜けする。

特にすることもないので何となく、ユリナのほうをちらりと盗み見ると何やら真剣そうな表情で考え事をしていた。

時折動く唇の動きだけでは何を呟いているのかもわからない。

「ユリ……！？」

俺が声をかけようとしたちょうどその時、階段前の通路の角から現れたソイツに言葉を失う。

それは、この前俺たちを追いかけてまわした　ドラゴンだったのだから。

ユリナもそれに気づいたらしく少し驚いたような顔をする。

幸い、あちからはこちらの存在に気づてないらしく、ゆっくりとしたペースでこちらに進んでくる。

「まさか、こんなに早く会えるなんて……」

ぼそぼそと呟いただけなので俺の耳には届かなかったが、ドラゴンの方へ引き寄せられるように歩いて行くユリナを見たとき、驚いて声を上げていた。

「ユリナ、やばいつてこいつだけはダメだ！」

その声によりやく向こうがこちらの存在を認識する。

しかし、ユリナは止まることなく相手に向かって突き進む。

素手で勝てる相手ではないし、ユリナは女の子なのだ。勝てるはずがない。

助けなければ、と一步を出した時に目の前に人影が立ちはだかった。

「マスター。どこに行くのですか？」

その人影はレナだった。

「ユリナを助けに行くに決まってるだろ！」

突然とつたレナの行動に理解できずに進もうとするがレナが抑え込む。

「あの女の子を助けたいのですか？」

今までとは打って変わった冷たい声に寒気が走るが、ここで引くわけにもいかない。

「助けたいに決まってるだろ！ どいてくれっ！」

「武器も何も持ってないマスターが行ったところで、何が変わるのですか？ しかも、彼女とは今日知りあったばかりなのですよ？ それなのに自ら危険を冒してまで行くというのですか？」

見ると、ユリナはどこから出したか分からないが、よく死神が持つているような漆黒の大鎌を振り上げているところだった。

「それに、あなたが助けに行く必要はどこにもない。彼女は望んでないかもしれない」

「そ、それは……」

すべて、レナの言っていることは正論で穴はない。でも、なにかが頭に引っかかる。

「やってみないと分からないって思っていますね。ですが、万一にもあなたが死んでしまった時はどうするのですか？ この前はレナが寄生する前だったから助けることができたのです。今回は違うのですよ。死んでしまったら終りなのです」

「……」

一瞬の静寂。

「は、ははは……」

さっきまであった頭のもやもやはつまりそういうことか。

「な、何ですかいきなり」

「いやあ、なんでそんなに必死に俺を行かせないようにしているのがさつきわかったよ」

確証はない。でも、俺が今ここにいるのはなぜか。

「俺は、お前がいないと死ぬんじゃないのか？」

ピクツと反応したのは見間違いではなければ、きっと

「レナが俺から離れると元の傷だらけの瀕死状態に戻って、いや、転生したんだから眷属悪魔か……ま、そんなのはいいとして、俺の身体にはレナの本体がある。俺がダメージを受けるとレナも食らう。二人で一つの身体なんだろう？」

レナの顔からさつきまでの冷たい表情が消える。

「だったら……」

そのあとの言葉を止めさせる。

「あいつは、昔の俺まんまなんだよ。誰かの前では決して自分を見せようとしないうちを待っている。だから」

「……行くんですね」

もう、何を言っても無駄だと悟ったか抵抗をやめて道を譲った。

「ああ、でもその前に……」

レナの前に立つと呟く。

「生きて帰るからお前の命。俺に託してくれ」

一気にレナの顔が真っ赤に紅潮する。

やっぱりレナはこうじゃないとな。

「そ、それじゃあ、ひとつだけ約束してくださいです」

「ん？」

「今度、レナにもマスターの命を託してくださいです」

彼女が俺に託してくれるなら、俺も託さなければ不公平だな。

「ああ、その時が来ればな」

そう言い残すと、ユリナのもとへ走って行った。

Chapter 2 想い（後書き）

今回は時間がないので省略します。
次回、できれば会いましょう。
では。

Chapter 2 敗走

服はボロボロで肩で息をする。

一方、ドラゴンの方は切り傷がところどころ付いているだけで疲れなど見せていない。

最初の不意打ちまがいの連撃ぐらいしかまともに攻撃が当たらないのだ。

ドラゴンは二メートル弱もの巨体を持っているにも関わらず、見事なまでのフットワークと素早い爪さばきで避けては、いなし、カウンターという実戦慣れした動きで翻弄する。^{ほんろう}

どう見ても状況は極めて劣勢だったが、それでも逃げるわけにはいかなかった。

一つは巻き込んでしまった二人を安全な場所まで逃げるための時間稼ぎ。

そしてもう一つ、これが一番の理由である。

私怨だった。

自分がまだほんの七、八歳の頃だったか、王都から遠く離れた辺境の小さな村。

そこが、ユリナの生まれた所であり暮らしていた村であった。

山で囲まれた疎遠の強い村であったが、豊作する作物や山の恵みで苦しくも貧しくもない平和な日々を送っていた。

ただ、その村の近くの山に存在する遺跡さえ除けばまったく何不自由することがなかった。

そう、こいつさえいなければ……いや、そもそも、あの遺跡さえなければ……

「くっ」

急に現実引き戻される。

ドラゴンの長い鉤爪が鞭むちのようにしなり、切り裂いてくるのを愛

用の大鎌の腹で受け止めるが、勢いを完全に殺すことができずに後方に押し飛ばされる。

もはや、踏んばる力すら残っていなかったユリナはピン球のように綺麗な放物線を描き、反身の状態で頭から床に向かって落ちていく。

もう受け身をとる力も残っていない。

このまま、床に叩きつけられればいつそ楽に死ねるだろうになどという考えが脳裏を掠める。

しかし、その考えはすぐに消え、代わりに二人が無事に逃げていくのが気になった。

自分の私怨のためだけに騙していたことに罪悪感がこみ上げてくる。

本当にこれでよかったのか？　と言う考えが今更になって頭中を占める。

そんな考えを振り払うかのように落下に身をまかせて^{まぶた}瞼を閉じた。

十

一瞬の出来事。

立ち止まりそれを眺める。それと同時に、ユリナならできるのではないか？　そんな考えが頭の中で粉々に崩れ去った。

宙を前衛芸術のような美しい放物線を描き弾き飛ばされていく少女に目を奪われる。

気を失っているのか、力を使い果たしたのか、重力に身を任せ堕ちていく。

このままでは　止まっていた足に力を込め、一直線に走りだした。

この辺りの大理石の床は光沢を失い、突起や凹凸^{おつとつ}が激しく何度か引つ掛かりそうになる。

あのユリナでさえ歯が立たないだと……そんな奴、一体どうすれ

ばいいんだ!?

分らない。でも、諦めるわけにはいかない。

目の前で傷ついていく人を見たくないから……

確実に距離は近付いているが、それはユリナと床の距離も近付いているということ。

手を伸ばせば触れられる。しかし、床とほぼ同時に触れることになるだろう。

覚悟を決める。

皮肉にも自分が魔族とのハーフであることに感謝して。

身体が宙に躍り、背中から滑りこむ。

金網の上でおろされる大根の気持ち痛みくらい伝わる。実際痛いんだが……。

目の前にユリナが自由落下をしながら近付いてくる。

気絶しているのか、目を薄く閉じて開かない。

腕を伸ばし、少女を抱くように腕で抱え衝撃を出来るだけ殺す。

「ユリナ……!?!」

痛みを紛らわしつつ、気合を入れるために叫んでみた。

なぜ、名前を言ったのかは聞かないでくれ……若気の至りってやつだ。

その時、俺が叫んだとほぼ同時にユリナと目が合う。

「……つつつ　!?!」

その表情は驚きと怒りと憤りと憤怒を混ぜ合わせた　最初以外、

怒っているじゃん!?!　　ような顔だった。

「んなつ!?!」

てつきり、気絶しているものだとばかり思っていただけに驚きが大きかったため、バランスを崩す。

かろうじてユリナを抱いた腕は放さなかったが、心臓が弱かったら死んでたのではないだろうか。

新たな殺人方法だな。それで殺したりしても、人殺しとなるのかは甚だ疑問だが……

バランスを崩し、ユリナを抱いたまま床を転がっていく。
ゴロゴロと転がりながら壁際でようやくとまることができた。
ばねのように腕を巧く使って衝撃を殺したため、床に叩きつけられるという最悪の事態は防ぐことができた。
全てが上手く言った。たったひとつを除いて……

目の前が真っ暗。

いやまあ、目を閉じているから当たり前なんだが……あけようにも砂埃が目に入ったのか、涙で視界が滲み、あけられない。
体全体に掛かるユリナの体重と顔に何かが押し付けられる感触。
口元を感じるそれは、柔らかく、程よい弾力をもち、温かった。
目があけられないので、何があるのかが分からないが、どこかで感じたことがある感触にくらくらする頭の中を総動員して検索する。
これは……あれだ。ええーと、水ようかんだっけ。

「んん……」

耳元でユリナのうめき声が聴こえる。

「ユリナ、大丈夫か？」

と言葉を掛けようとするが口が塞がれてでてこない。
恐る恐る、目を開く。と、そこにはパチクリと目を丸くしたユリナの驚愕した表情があった。

なぜこんなところにユリナの顔が、と考える前に口元に感じた感触が何なのか理解する。

ゆ、ゆゆ、ユリナの唇だとっつ！？

腕は、未だに身体に回した状態でユリナが重なるように玲の上にのしかかっており……

傍から見れば、ユリナが押し倒した状態である。

当の本人は、目を見開いたまま死んだように硬直してしまっていない。
動かない。

いや、本当に死んでないだろうな。

これで、死んでたらどうすんだ。死刑か、無期懲役か？

などと馬鹿なことを考えていると、自分が立たされている立場を
思い出す。

すばやく、抱いたままだった腕を解き、横にどかしてユリナの圧
力から解放される。

そして未だ、放心状態のままで固まっているユリナを抱きかかえ
て逃走を開始する。

運が良かったのは、興味が無くなったのか追撃をしてこなかった
ことだろう。

腕に抱えた、ユリナはどこにでもいる少女のようだった。

Chapter 2 敗走（後書き）

遅くなりました。すみません……

いろいろ忙しかったのに加えて、ストーリー構築が暗礁に乗り上げて大変だったんですよ。

んー……話すネタがないですね。

というわけで！！ 誰かネタくださいっ！！
ついでに、物語の……ゴメンナサイ、すみせんもついいいませんから……

仕方ないので、最近ハマったモノの話でも。

え？ 知らない？ じゃあいいや。

シークレットゲームとかよかったけどね。

それでは、次回また会いましょう。
では。

Chapter 2 交錯

上の階に戻り、階段から離れた小部屋に滑りこむように入り、ようやく重い腰を下ろすことができた。

綺麗とはいかないが少し埃っぽい床に腕に抱えた少女を床に下ろす。

いわゆるお姫様抱っこというやつで抱えていたのでそれほど下ろすのに問題はなかった。

この抱え方だと、そんなに負担がかからないことが分かったので、今度からこの抱え方にしようかと、悩んでいると。

「あー……」

今さらになつてだが……レナを置いてきたことに気が付いた。

ちゃんと逃げ切れたのかが気になるが、ユリナはこんな状態で置いていけないし、かといって連れていくのも危険だ。

仕方が無いので無事であることを祈って、ユリナが立ち直るまでいることにする。

今度会ったらくち文句を言われそうだが今は気にしないようにしよう、うん。

「はぁ……先が思いやられる」

どっこいしょとオヤジ臭い掛け声を上げてユリナの隣に腰を下ろす。

「……あんた、何で逃げなかったのよ」

「あ、気が付いたか？」

「……」

「起きて第一声がそれってどうよ？ 人が必死に助けてあげたのに、ため息を付きながらユリナの悪態を突く。」

「……別に助けをよんだ覚えは無いわ。勝手に助けに來ただけじゃない」

少し、言葉を詰まらせるがすぐに皮肉を返してくる。この調子だと大丈夫そうだな。

「だいたい、あなたもみんなと同じでしょ？ 自分の命が愛しいんでしょ」

「……」

どうなんだろうな？ 一回死んでるし……所詮人の命って測れないけど軽いんじゃないかなって思うんだよね。

「ほらね。……でも私は死んでも譲れないの、これは私の復讐であり、目標なんだから」

「……」

ユリナの性格が何となくわかってきた……なんというか一直線というか直情というか、全部自分で背負いこむタイプなのか。

「九年前に私の家族……ううん、私以外の村のみんながあいつに殺されたのよっ！ 目の前で……」

目の前の少女は、その時を思い出し恐怖と悲しみに歪んだ表情を浮かべる。

「だから、復讐を？」

「ええ、そうよ！ あんたに何が分かるっていうの？！ 一人残された者の気持ちがつ……」

「分かるよ。俺もこの世界に知ってるやつは一人もいない。状況はお前と違うが同じだ」

「っッ！？」

レナから俺の経緯は聞いていたことを思い出して申し訳ないような、気まずい表情になる。

「気にすんなって、でもなあ気持ちはわからないことはないんだけど……なんていうか、そんな気休めで納得したくはないんだよね……誰かが誰かを憎むことは簡単だけど、許すことは難しいんだ。それでも、俺は許す道を選ぶと思う」

「……」

「だってそんな復讐、きつと誰も望んでないはずだし、自分の罪を

正当化するための言い訳にしかないから。胸が痛いのは分かる。俺だってお前の立場ならそう考えるかもしれない。でも……それじゃお前はお前になれないんじゃないか？」

「……」

長く沈黙を保ってきたユリナがようやく口を開いた。

「あなたの言い分は分かった」

「じゃあ」

「言い分は分かったって言うただけよ。あなたと私は相容^{あいい}れない。

ほら、命あつての人生でしょ？ ほらっさつさと逃げなさいよ」

突然、今までの親しみやすい話し方から赤の他人に接するような態度に変容する。

「ちょ」

踵を返し、立ち去ろうとするのを反射的に肩をつかもつと手を伸ばす。

「触らないで！」

背を向けた状態で殺気とも言えないまがましい気を出しながら、玲の首筋に大鎌を添え付け、動くか引けば間違はなく首と体が離れる状態を作り出した。

それでも、前に ユリナをつかもつとするが、全身からいやな汗が吹き出し、思うように動くことができない。

「ごめんなさい。私はこの戦いを辞^やめることは出来ないから……助けてくれたことはありがとう。そして、さようなら」

有無を言わさぬ口調でそう言い残すとボロボロの体を虚空から出した鎌で支えながら部屋を出ていった。

十

ユリナが出ていったあと、大きく息を吐き出して壁にもたれるように玲は座り込んだ。

「……」

助けるって言うておきながら何一つできなかった。

いや、正確には彼女には意味のない事だった。

なら助けない方が彼女は楽になれたのか。

答のない問題が頭の中をグルグル廻る^{まわ}。

「……大丈夫なですか、マスター？」

そうしていると何も無い目の前の空間からレナが現れた。

「……ん、ああ……レナか」

垂れた頭を持ち上げて今までと何一つ変わらない表情の少女を見上げる。

突然出てきたことは、何らかの形で繋がっているというのなら特に驚くことでもないし、今はそんな気分ではない。

「さっきまでの一部始終は、見させて頂きましたのです。……マスターはそれで、どうするのですか？」

どうすると言われても、戦闘経験も武器もないに等しい俺が行ったところで意味が無いのは明らかだ。

「もう諦めてここから出たらいいいことじゃないのですか？　ここから出て他の人に助けを求めるのも一つの手なのですよ」

「それも多分あいつは望んでないと思う……いや、望まない」

ユリナが望む形でこの戦いを終わらせることはできないのか……。

「マスターはどうしても彼女を助けたいのですね？」

「ああ」

きつと彼女は誰にも心を許せられなかったんだ。

それでも、生きていかなければいけない中で、周囲に擬態するように周りの環境に自分が合わせて、自分を隠して生きてきたんだ……

……自分がそうであったように。

でも俺には琉惟たち　心を許せる相手が見つかったから自分という一人の人として見てくれたから今があるんだ。

今、彼女の気持ちに通じるのは自分だけしかない。

なあ、お前の一生はそんな終わり方でいいのか？

一生？　終わり……。

「……なあ、レナ。俺も」

俺の言葉が言い終わる前に血相を変えたレナが言葉を遮る。

「ムリなのです！ それは、マスターはできません。……いや、できないことはないですが、やったらダメなのです！！」

そこまでレナが必死に否定する玲の言葉の続きは。

魔族の能力が使えるんじゃないのか。

シャロンが使っていたような不可思議な力……せめて、あれでもあれば俺でも何かできるはずだと考えたのだ。

「できないことはないなら、どうしてなんだ？」

「本来、あの力は魔族マスターの存在が、発動後に消滅してしまうのですよ……」

「……なんだあ……そんなことか。俺はそんなことは気にしないぞ？」

「なっ？！ ……マスター正気なのですか！！ 消滅なのですよ！ 何もなかったことになるのですよ！」

レナが信じられないものでも見るような表情で俺の顔を見ているが、そんなことはどうでもいい。

今覚えば、ここに来たばかりはすべてが敵対しているものに見えて不安だった。

なのに、いつの間にか、思えばすぐさつき会ったばかりのレナには心を開いていた。

ずかずかと心の中に入り込んできては、馬鹿みたいに笑って明るくしてくれた。

そんな奴だから心を開けたのかも知れない……まあ、いつも開いてる状態だけだな。

ならば、今度は俺があいつの中に入って行けば、なんとかなる……そんな気がする。

「ああ……消え去れるなら、それに越したことはない。あいつらにまでこれ以上迷惑をかけられないし……な。ここで、消えて存在がなかったことになればすべて丸く収まる」

「……」

「ああ、どうせ、いつかは俺一人なんか居たっていう証でさえなくなってしまうんだからな」

「……」

「しかし、死ぬ瞬間を二回も味わえるって俺の人生どれだけついてないんだよなあ」

「……」

「おい、そこは笑うところだろ!？」

何とかして、この重たい空気を払いたかったが俺にはムードメーカーは向いてないみたいだ。

「正確には、三回なのですよ。さっき彼女は、マスターをここで殺しておく氣みたいでしたのですから」

「はあ？ 何でだよ。冗談、言うなよな」

彼女に限ってそんなことはないはずだ。

「あれ？ 気づきませんでしたのですか？ まあ、マスターに分かれって言うのも無理なのですが、さっきマスターが感じた嫌悪感^{けんお}は高濃度の殺気なのですよ……」

Chapter 2 幕開け

レナの口から洩れたその言葉を小さく反芻する。

「殺気……？」

なんでだ？ いや違うだろ……あのユリナに限ってそんなことは……。

「マスター？」

だって、一時の無理やりとはいえ仲間だったのに……。

ユリナだって上手く俺たちと馴染んでたじゃないか！？

「マスターッッ！！」

レナの声が耳元に聞こえたかと思うと、頬に鋭い痛みと甲高い平手打ちの音が部屋に響いた。

「ッ？！」

突然のレナの激昂に殴られたということも忘れ、茫然と目の前の少女を見る。

「ぐちぐちとうるさいのですよっ！！ 殺気がなんだったっていうのです！ 殺されそうだったのがなんだっていうんです！！ 所詮『だった』ことじゃないですか！！ 真実と事実は違うのですよっっ！！」

一息にこれまで溜め込んでいたものを爆発させるような勢いで思いを言葉でぶつけた少女が肩で呼吸をする姿を、殴られた頬をおさええてただ眺める。

呼吸を整えて、真っ直ぐに目を合わせて幾分かマシになった口調で続ける。

「レナも、ユリナちゃんの立場ならばっさりと切り伏せているところなのですよ！ でも、マスターが心底からそう思っていると感じたからこそ思いとどまったのです」

ようやく、思考が回復した頭に真っ先に頭をよぎった疑問にレナが反応する。

「復讐のためだけに力を使うのか？　ですか。どうしてだと思いますのです？」

「……」

「……その方が、強くなるからです。来たばかりのマスターには分らないのでしょうけど、この世界は魔物で溢れ返っていますのです。ですから、弱い存在は世界に喰われるのです……」

レナはそこで言葉をきり、こちらの反応をうかがう。

「強くなれば、すべてを護る力^{まも}でなくても、危険を壊す力さえあれば……そのために過酷な道を選んだのです」

「……」

「恨むことは簡単ではないと言っていましたですが、地震や嵐、津波のような災害がいつぺんに起こりマスターの町が壊滅して、マスターだけが生き残ったとしますのです。マスターは何を恨みますですか？　災害を恨みますか？」

「あ……」

「魔物による災害もこの世界では自然災害のようなものです。ただ、災害元に生命があるかないかによる違いだけなのです。そして、この世界で災害を縮小する方法は強くなること。だから、強くなるための厳しい修行にも折れないようにとどうしようもないものに恨みを抱くことしかないのですよ」

まさか、そんな理由だけであいつは自分を縛りつけて生きてきたのか……

ただ純粹に力のみを求める。壊すことで護る力。

それが悪いとは言わない。でも、限りある命を楽しむも何もないただただ血で洗う人生なんて……

「先に謝つとくよ。ごめんな、レナ。生きて帰るって約束、守れそうにないや」

「な、何を言ってるのですか！？　ダメですよ！　そうすれば、マスターが……」

「いや。いいんだ。もとは終わった命、惜しくないしな。それに、

誰かのためにこの命を使うのならみんなから忘れられたって別にいいよ」

なんだろうな。

意味もなく生きて意味もなく死んでいくんだろうなと思っていたのに、突然現れた魔族に殺されて、『俺の人生案外あっけなかったな』とか思いながら目を閉じたのに、まだ終わりじゃなくってこの世界で……

「ま、マスター……？」

……ずかずかと人の事も考えずに心の中に入ってくる奴や高飛車で初対面で暴力を振るってくるけど憎めない奴とかに出会って、俺の存在がなくなっても誰かがこの終わった命で幸せになれるなら、使ってもいいと思っていたのに……

「……どうして涙が出るんだろうね」

溢れ出る涙を服の袖で拭う。

「未練があるからですよ……誰もその気持ちは否定できないのですよ。これから死に行くのなら尚更なのです」

そして、それでも本当に行くのですか？ と付け加えた。

「……やめてくれ」

「やめるのですか」

ぱあつと表情を明るくしたレナの顔は夏の草原に咲き誇るヒマワリの花畑のように見えた。

「それは……ない。けど、そんな風に言われると止めたくなくなるから」「っ！！　ますたあ？　やめましようなのですよ？　やったところで何もない、メリットもないですよ？　もしかしてマスターってバカなんですか、そうなんですね！！　マスターは　イタッ！　ひははははは……　ひはいほへふお、まふはー（いたたたたた……痛いのですよ、マスター）」

無言でほっぺをつねってみる。

おっ！　こいつのほっぺムニムニして気持ちいいな……どこまで伸びるかお仕置きのついでにやってみるか。

「まふはー、ゆふひへふだはい（マスター、許してください）」
仕方がないので、さらに二、三回引つ張ってから手を放した。

「う……上手くいったかと思ったのになのですう」

あれで引つかかるのはホントに馬鹿かよっほどの頭のネジがぶっ飛んでるやつだけだろうな。

「なんかレナがばかみたいない方じゃないですかっ！」

「そういうつもりで言ったんだけどな」

ピシャー……ツツンとレナの背後で雷鳴が轟いた気がした。

「うつ……うつ。屈辱なのですう。今まで何人かマスターに仕えてもらいましたけど……」

おい、こら。ちょっと待て。仕えるのが逆じゃないのかっ？！

「でぶつちよで、ハアハアとか気持ち悪い呼吸しながら、レナちゃんとかぬかした中年野郎とか、タキシード服のお嬢様と慕ってくれた人はレナのことを一番に考えてくれたのにっ！？」

「いろいろと突っ込みどころ満載だが……もういいや、今までの人が可笑しかったただだからな。それ」

相手をするのがもうめんどくさくなった。

分かったことは、こいつの意味の分からない自信と言動はそこから来たのかということだけ。全然嬉しくねえけどな。

もう、今死んでもいいや。なんてことを思いながら、ほっばいて一人ユリナを追いかけるために部屋をでたのだった。

十

もう何度、振り返っただろうか。

何十回いや、百何十回か？ それほどちらちらと後ろを確認しなければいけないほど落着きがなかった。

あの時点で、彼を切り捨てていればこんな杞憂は要らなかったは

ずだ。

しかし、できなかった。

正面で対峙^{たいじ}してはいないとはいえ、常人があればどの殺気を受ければ無事では済まない。

十秒と持たずに卒倒するだろう。

しかし、彼はそうではなかった。

強い殺意を受けてもなお、向かってくるほどの強い意志が感じ取れた。

それが、逆に自分にとって恐ろしかった。

何か裏があるのではないか？　今はああだけど……いざという時、危険な状況になったら手の平を返すのではないのか？　今までがそうであったように

だから、最初から彼らは信用していなかった。

あの部屋のドアノブに手をかけたのがすべての元凶といってもいいだろう。

一瞬のうちに濁流とも呼べるスライムだった液体に吞まれて、レナと言ったパラサイティアには見つかつて、不自然に思われないように実習と偽って一人で来たことも隠した。

実際は、四人いたが理由を話すと慌てだして、拳句に先生に言いに行こうとしたところを気絶させた。

友達といっても所詮その程度。

周りはすべて敵。そう思つて過ごしてきたのに、あいつに会ってからその意思が揺らぎ始めた。

実は、自分がそう思っていただけで世界は自分を受け入れてくれるのではないのか、と。

ユリナは頭を振る。

集中、余計なことは考えない。そう言い聞かせるが、振り返つては彼の姿を探してしまう。

本当にどうしたのだろうか。

答えが出る前に会ってしまった。

ヤンと.....。

Chapter 2 幕開け（後書き）

ども。最近、東方の永い夜のExをクリアした風くんです。
へちつて、下書きが無に還ってから、行き場のない怒りをぶつ
けたいっちゃん

分からない人はスルーしちゃってください。ただのロリっ娘？
シューティングゲームですww

……で、久しぶりの三千字超えだったはず。

しかもなんか、お気に入りが増えたのが新鮮な驚き！

なんか、ぐだぐだしてなかった？

自分で言うのもなんですが、自己満で終わらせたくないと思って
ますけど、読者はどう思っているのかが甚だ疑問。

辛口でも一言でもいいので、コメントをくれたら今後の方針や励
みになるのでお願いしますですよ。

これだけ言っても、将来は作家じゃないんですけどね。

では、次回また会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2517n/>

Magus Magina† マギウスマギナ†

2011年3月2日16時55分発行